西松会新聞 The Yushokai Shimbun

第 14 号

令和３年（2021）３ 月 15 日 発行

巻頭挨拶　P３

- 緒方　徹　（昭 49 卒 会長）：一橋大学ア式蹴球部百年の年に

小平 G 人工芝化プロジェクト　P４

- 福本　浩　（昭 52 卒 編集長）：思い出は遠ざかり、夢は近づく
- 中田 裕之（４年）：人工芝化への感謝、そして抱負
- 生田目 彩（２年 MGR）：ありがとうございます

戦いを終えて　P11

- 西山 拓美（４年 主将）：コロナのシーズンを終えて
- 山本 健太（４年 GM）：最後の学生サッカー人生
- 雨宮 一郎　（４年）：ア式蹴球部での４年間を終えて
- 木田 力斗（４年）：負ける事と好きな事
- 瀬山 謙人（４年）：普通の尊さ
- 中野 英司（４年）：新しいスタート
- 達　康大（４年）：想いの強さ
- 八田 健吾（４年）：４年間を終えて
- 林 遼太郎（４年）：ア式で得たもの
- 松田 悠太郎（４年）：最後の１年に考えたこと
- ヘルバート弥呂（４年）：サッカーができる幸せ
- 名徳 泰地（４年）：感謝
- 木村 映美（４年 MGR）：挑戦を終えて

令和３年度シーズンに向けて　P28

- 北西 真之（３年 新主将）：再出発
- 七条　拓　（３年 新 GM）：躍進の年に！
- 佐藤 由都（２年）：主体的に行動すること
- 善養寺 峻史（１年）：ア式生活１年目
- 向井 友紀（１年）：今までの振り返り

特集：海外コロナ事情　P34

- 高橋 良多（昭 51 卒）：コロナ禍インドでの奮闘記
- 篠崎 信弘（昭 52 卒）：“こちら、ヒューストン！”
- 岩田 淳一（昭 58 卒）：スペインのコロナ状況
- 粟津 義一（平７卒）：コロナ対策万全のシンガポール
- 神谷 佳典（平７卒）：コロナ報告 from シリコンバレー
- 重満 紀章（平７卒）：ベトナムは、コロナどこ吹く風 !?

私の学生 LIFE　P50

- 江口 雄介（４年）：「国立コミュニティー」の結束
- 太田 悠斗（４年）：早起きは三文の徳？
- 宮林 佑太（４年）：自分の目から見たア式 LIFE
- 櫛田　潤　（３年）：平凡で非凡な every day
- 井上 絢菜（３年 MGR）：おうち時間のマイブーム
- 加藤 紘基（２年）：コロナ禍の楽しさと悔しさ

追悼　P58

- 橋本 昭一（昭 31 卒）：畏友 志摩憲一を偲ぶ

編集後記　P60

- 福本　浩　（昭 52 卒 編集長）：コロナ禍から新時代へ

⚽ 一橋大学ア式蹴球部百年の年に

緒方　徹　（昭 49 卒 酉松会会長）

2021 年、我がサッカー部は創立百年という節目を迎え、
宿願であった小平グラウンドの人工芝も完成する。
目にも鮮やかな緑の芝の上で熱心にプレーする現役諸君の姿が目に浮かぶようである。

人工芝は、思えばおよそ 10 年前から構想が始まった。
この間、紆余曲折を経て、近年、特に平成 7 年卒業の皆さんを中心とした人工芝担当幹事団の
献身的な尽力によって実現への道が開けたと思っている。この間、多くの幹事の皆さんと共に考え
継続して努力できたことに改めて深く感謝したい。そして何より寄付に応じてくださった
多くのＯＢ・ＯＧ、そしてご父母などの皆さんに心から御礼を申し上げたい。

一方で、前年からの新型コロナウィルスの感染拡大は日本のみならず、全世界を巻き込み、
人間の価値観や生活環境を一変させる事態となっている。これを書いている時点では変種の
ウィルスなど今後の経過も予断を許さない状況である。一刻も早い感染の終息を願うばかりだが、
どういう考え方で日々を過ごせば良いのか、改めて思いを巡らす時でもあると思う。

2020 年の「今年の漢字」は「密」だった。
「三密」という言葉、実は、空海が大事な教えとしたそうだ。
身体の「身密」、言葉の「口密」、心の「意密」、この三つを整えることが大切だという。
また、これとは別に、「自利利他」という教えが重要とされているそうだ。
自分が幸せになることが人を幸せにする、人を幸せにすることが我が身の幸せになる
ということだそうである。

日本で一番古いとされる龍谷大学。その入澤崇学長から色々と示唆をいただいているが、
「自省利他」という行動原理を新たに説いておられる。人間の自己中心性に気づき、
このままで良いのだろうか、欠けているものは何かと自分の有り様を省みてゆくことが、
自己変革に繋がる。そして、自分という存在が他者との関係から成り立っているのだと
改めて認識できるという。コロナ禍の一刻も早い鎮静化と皆さんの健勝を願いつつ、
サッカー部の１世紀に思いをはせる中で、改めて考えてみたいと思っている。

小平Ｇ人工芝化プロジェクト

⚽ 思い出は遠ざかり、夢は近づく

福本　浩　（昭 52 卒 編集長）

2020 年 12 月 1 日から、小平グラウンドの工事が始まる。
樹木・雑草の除去、やぐら・散水機・転圧機など残置物の撤去、整地と排水設備の改修、
そして人工芝の敷設。施工期間は４ヶ月。長年の夢が実現するのだ。

12月中旬、排水設備の改修工事が進む。サッカーコートの外周に側溝が新設され、
ほとんどが壊れて使えなくなっていた散水用のレインガンやスプリンクラーは撤去された。
「小平湖」と「小平砂漠」に悩まされることは、もうない。
土のグラウンドに刻んだ思い出は遠ざかり、夢は近づく。寂しさと嬉しさが、去来する。

下の写真は、人工芝の下に敷く「板状暗渠シート（面状排水材）」。
降雨の際、浸透した雨水を外周の側溝へと導く「導水管」の役割を果たす。
管ではなく板状であるが、中に水の流れる空隙があり、５m間隔で魚の骨状に設置し、
その上に砂利を敷いて舗装する。（次ページ「排水施設平面図」参照）

2021 年 2 月 12 日、ついに待ちに待った日が来た。
１枚ずつ接着と縫合で繋ぎ合わせたロール状の人工芝が、グラウンドの上に
丁寧に敷かれていく。まるで緑の絨毯のよう。１週間後には真っ白なライン芝も敷き込まれた。

そして３月初旬、真新しいサッカーゴールが設置され、シュート板も 50 年ぶりに新調された。
生まれ変わった小平の人工芝グラウンドから、一橋大学ア式蹴球部の、次の 100 年が始まる。

最後に、もう見ることができない土の小平グラウンドの写真を。昨年２月１５日の三商大戦。
その２０日後、コロナ禍で活動停止となった。改めて感慨深いものがある。

⚽ 人工芝化への感謝、そして抱負

中田 裕之 （４年）

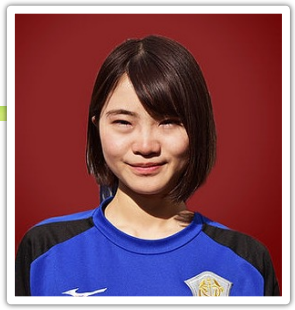
この４年間、OB・OG の皆様には多大なるご支援ご声援を頂きました。
心より感謝申し上げます。 とりわけ、小平グラウンドの人工芝化に
関しまして金銭面のみならず、多方面でご協力頂きましたこと、感謝してもしつくせません。
私の代がア式蹴球部に在籍した４年間には人工芝化を実現することは出来ませんでしたが、
今後、未来永劫ア式蹴球部は最高の練習環境が保障されました。
ア式蹴球部を愛する者として、これ以上に嬉しいことはございません。

現在、ア式蹴球部には強い追い風が吹いています。
小平グラウンド人工芝化工事の完成はもちろんのこと、戸田コーチの着任、ア式蹴球部の変革に
努める優秀なスタッフの入部など、１部復帰に向けて最高の状況にあります。私も今期こそは
新緑の 小平グラウンドの上でア式蹴球部が１部復帰を成し遂げる姿をOBとして見届けたいと
思います... と言いたい所なのですが、実は私、今年度もア式蹴球部にプレーヤーとして残留する
ことに決めました。理由は２つあります。

１つ目の理由は、１年生時の実質３~４か月にも及ぶ部活動停止と
４年生時のコロナウイルスによる半年にわたる部活動停止、これらを合計して差し引くと、
私はア式蹴球部において３年未満しか活動をしていない、という驚愕の事実が判明したためです。
本来、ア式蹴球部員が部活動に励む期間は３年半。今年１年の活動期間を付け加えることで
私もア式人生を全うした、と言うことができそうです。

（正直に申し上げると、自分も実現に携わった人工芝グラウンドでプレーできないのは
悔しいというか、後輩ばかりずるいというか、そんな感情もあります…。）

冗談はさておき、もう１つの理由、本当の理由は、私がア式蹴球部を１部に復帰させたいと
強く願うためです。これは私の完全なるエゴです。私のサッカー人生を、ア式人生を悔いなく
終えて社会に出たい、そう願うがための自分勝手な願いです。この願いが叶わなければ、私は
内定した戦略コンサルティングファームでも全くパフォームせず、一瞬で首になるでしょう。
ですので、どうかもう１年、皆様にご支援ご声援を賜りたいと思います。
大変なわがままを申し上げますが、最後の１年、何卒宜しくお願い致します。



⚽ ありがとうございます

生田目 彩 （3年 MGR）

この度は、小平グラウンドの人工芝化計画の為、ご寄付くださいました
ＯＢ・ＯＧの皆様、ご父兄の皆様、また実際の計画にご尽力いただいた
方々に感謝を申し上げます。土埃や泥状態のグラウンドに悩まされることなく練習ができる
喜びは勿論のこと、この短期間で本当に芝計画が実現したことへの驚き、ＯＢ・ＯＧの皆様や
ご父兄の皆様のア式に対する想いに心を打たれました。

思えば土のグラウンドには、芝のグラウンドとは別の苦労がありました。
例えば雨上がりの練習日、選手が紅白戦を行っている間、ひたすらマーカーについた泥を落とす
作業はキリがなかったです。また風に舞った土が水のボトルに付着してしまっているのを見て、
衛生的に良くないのではと心配になったこともあります。さらに１年次の秋頃に小平で公式戦を
開催したことがあったのですが、その日は何組か試合が入っていて、試合が終わったチームに
すぐに場所を空けてもらう必要がありました。すると相手校の選手が、仲間が脱いだ服を大量に
抱えて右往左往していました。土の地面に置きたくないのだろうなと思いゴザを渡すと、心から
感謝されましたが、逆に土のグラウンドに来てもらっていることに申し訳なさを感じました。

ただ１年生の間のみとはいえ、慣れ親しんだ小平グラウンドの風景が変化してしまうことに
寂しさを感じる面もあります。部室棟の水が止まりシャワーが使えないと伝えた時の選手たちの
嘆きようや、コロナによる自粛が明け、数ヶ月ぶりにグラウンドに行ってみると雑草に覆われて
いたことなど、振り返ると笑える記憶がたくさんあります。また間違っているかもしれませんが、
私はア式に対して練習に対する姿勢やプレーが、どこか泥臭いという印象を持っています。
この泥臭さは文字通り泥臭い小平の土のグラウンドで練習してきたことに影響されているのかも
しれないと考えたことがあります。これは単なる思い込みかもしれませんが、毎日練習を行う
環境がチームに大きな影響を与えるのは確かです。人工芝となったグラウンドで練習するア式が
今後どのようなチームになるのか、成長した選手たちがどんな活躍をしてくれるのか、
それを見る日を心待ちにしています。

改めてこの１年間を振り返ると、コロナの影響で活動が大きく制限された年でした。
自粛期間中のマネージャーとア式の関わりは ZOOM を用いて開かれたミーティングくらいで、
例年なら行われるはずの合宿もなし。また自粛が明けても以前と同様の活動は叶わず、特に
公式戦で観客席からのパワーに溢れた応援歌を聞けなかったことが寂しく、試合のたびに歌われ
記憶されてきた数多くの応援歌が、忘れられてしまうのではないかと不安にもなりました。
2021 年度はワクチンの接種が進み、コロナ流行以前の体制で部活が行えることを切に願って
います。また、このようなタイミングで人工芝のグラウンドが完成することは、
コロナ後に向けた新たな一歩を、大きく後押ししてくれるのではないかと期待しています。

令和２年度シーズン総括

新型コロナウィルスの感染拡大で３月４日、大学は課外活動と学内施設使用の自粛を要請。以後、部員は個々の自主トレを余儀なくされ、８月初旬までの５ヶ月間、全体練習が一切できない異常なシーズンとなった。春季リーグも中止。９月５日から始まった秋季リーグも日程が縮小されこれまでとは違うルールでの開催となった。すなわち、10 チームが総当たりで Home & Away 18 試合を行うのではなく、１巡目の９試合が終了した時点で上位と下位５チームずつに分かれて４試合を行い、計 13 試合で順位を決めることになったのだ。また上部リーグとの入替戦は行うが下部リーグとの入替戦は中止となり、降格はなくなった。以下が、一橋の戦績である。

【戦績】東京都リーグ２部：６位　５勝６敗２分　　◎不戦勝

	亜細亜	東大	上智	玉川大	武蔵	成城	理科大	都立大	東工
秋	● 0 - 1	○ 3 - 1	● 0 - 1	● 0 - 1	● 1 - 2	△ 1 - 1	● 0 - 1	◎ 3 - 0	○ 2 - 0
	ー	ー	ー	ー	ー	△ 0 - 0	● 1 - 2	○ 2 - 1	○ 6 - 0

【順位】　＊東工大は運営要綱違反により勝点から９点減じる

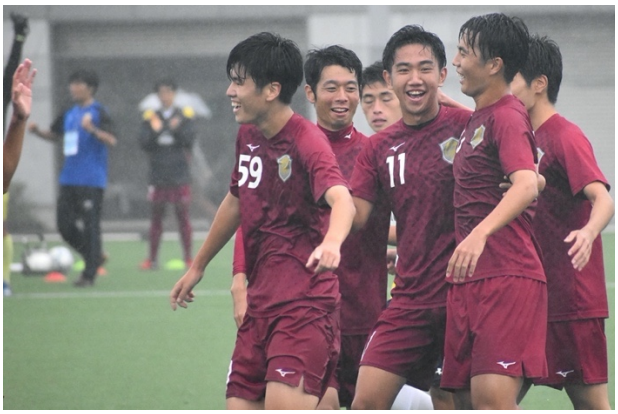
順位	大学	勝点	勝	負	分	得点	失点	差
1	亜細亜	37	12	0	1	33	3	30
2	東 大	27	9	4	0	23	12	11
3	上 智	25	8	4	1	24	12	12
4	玉 川	21	7	6	0	19	17	2
5	武 蔵	20	6	5	2	19	18	1
6	一 橋	17	5	6	2	18	11	7
7	成 城	14	4	7	2	28	24	4
8	理 科	13	4	8	1	8	27	-19
9	都 立	9	3	10	0	10	32	-22
10	東 工	-2	2	10	1	12	38	-26

【課題】

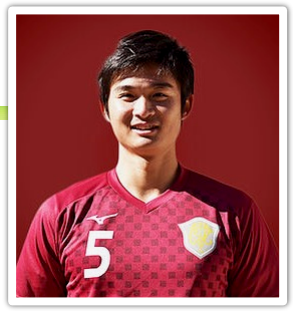
６敗のうち、５試合が１点差の惜敗。ある程度の守備力は備わっているが得点力に慢性的な大きな課題を抱え、また特定の個人に依存せざるを得ない「属人的」なサッカーなので、それを欠いた時の解決策がない等、わが部が長年抱える問題点を戸田和幸コーチが明確に分析し、１月の総会で報告した。

今シーズンからコーチに就任した戸田和幸氏（元Ｊリーガー、2002W 杯日本代表）は、“ア式が慣れ親しんできた感覚的で身体面とメンタルに重きを置いたサッカーから「ゲームモデル」の構築や「戦術的」にプレーするサッカーへの移行・脱却へ”という目標を学生と共有し、２つの大きな改革を行った。１つ目は、チームを AB２つに分けた。A は戦術的な練習に最適な 24 名で（FP22 名・GK2 名）東京１部昇格ベースでのプランニングを行い、残りは B で個々のレベルの改善・成長を促し A へと繋げていく。２つ目は、週５日の活動を６日にした。これまでは木曜が休みだったが、リーグ戦の開催日が日曜なので、最も試合に近い負荷と内容で準備ができる木曜を休みにするのはチームのマイナスにしかならないからである。これらの改革は、今季の東大戦や東工大戦の勝利など徐々に実を結びつつあり、来年度から戸田氏は監督としてチームを率いる。

戸田和幸コーチ
MORELI



HITOTSUBASHI UNIV.
FOOTBALL CLUB
KIRIN



コロナのシーズンを終えて

西山 拓実 （４年 主将）

まずは OB・OG の皆様、保護者の方々をはじめ、
現役の活動を見守ってくださった全ての方々にお礼を申し上げます。
特に今年度はイレギュラーなシーズンではありましたが、皆様のご理解と
ご協力があったからこそ最後までやり抜くことができました。ありがとうございました。

今シーズンは、今までに経験したことがないくらい理不尽で、もどかしい１年でした。
部活動の停止が通達されたのが 2020 年３月。先行きが不透明な状況に加え、戸田さんという
外部コーチに指揮をとっていただく新たな方針が始まったばかりでもあり、シーズン開幕に向け
不安を抱えていたのは自分だけではなかったと思います。しかしこの難局の中で全体での練習が
できなくても、部員全員が活動再開後の飛躍を誓い、個人練習に取り組むことができていたと
感じています。実際、活動停止期間中の３月から８月まで、週５日の体幹トレーニングを
オンラインで行っていましたが、画面越しとはいえ、各々モチベーションを低下させることなく
ひたむきに励む姿が見られたことは、自分にとってポジティブな要素の１つになっていました。
と同時に、これはア式に属する人間の主体性の高さを垣間見た瞬間でもあり、頼もしさを強く
感じました。

その後、８月に部停が解除、９月にリーグ戦開幕という
非常にタイトなスケジュールの中で心身ともに万全の準備を行ってきましたが、終わってみれば
５勝２分６敗と結果が振るわないだけでなく、なかなか練習での取り組みをピッチで表わせない
非常に苦しいシーズンになってしまいました。しかし、厳しい状況でも全員で支え合ってやれる
ことをやりきったという点で悔いはありません。またコロナで会えない状況でもオンラインでの
ミーティングを始め、その場その場で部に対しての最善のアクションを自分たちで考え続けた
ことは、今後の部の発展に大きく資するものであると信じています。

目標として掲げていた１部昇格は達成できませんでしたが、
来シーズンこそは一回りも二回りも大きくなった後輩が、これを叶えてくれると信じています。
そして今後ア式蹴球部は、間違いなく今よりもずっと大きく強い組織になっていくと
確信しています。引き続き温かいご支援、ご声援をよろしくお願い申し上げます。
僕自身も１人の OB として、後輩たちが全力で戦う姿を支えていければと思います。
４年間、本当にありがとうございました。

⚽ 最後の学生サッカー人生

山本 健太 （４年 GM）

今シーズンは新型コロナウイルス感染拡大により、例年とは
大きく変わった１年となりました。リーグ戦は規模を縮小して開催され、
アミノバイタルカップなど、その他の公式戦は全て中止となりました。私たちア式蹴球部も
３月から８月まで大学から活動を禁じられ、毎朝のオンラインの体幹トレーニングなど画面越しで
切磋琢磨 する時間が長くなりました。また活動再開後も毎朝の検温やアルコール消毒、人数制限
など感染対策を徹底しつつトレーニングに臨む日々となりました。この記事では１年間を３つに
区切り、その時々で私自身がプレイヤーとして、GMとして感じたことや考えていたことを書いて
いきたいと思います。

１-２月：シーズンイン

例年通り１月中旬に冬オフが明け、４月のリーグ戦開幕に向けた活動がスタートしました。
２月の頭から戸田和幸コーチに本格的に指導に入ってもらい、AB２チームに分かれての練習に
取り組むことになりました。これまでのア式は一体感を大切にしてきたこともあり、練習中の
プレイ時間などはトップの選手であれ B の選手であれ平等に与えられていました。しかし
今シーズンからは、より緻密なトレーニングメニューの中で、B の選手はプレイする以前に A の
選手を見て学ぶところから始まることもありました。これについては部員それぞれの立場で思う
ところがありましたが、何よりもチームの目標が東京１部昇格である限り、トップチームを優先
することは避けられず、また合理的だったと感じています。トレーニングマッチや関西遠征など
実戦的な経験も積みながら、チームとしての完成度は少しずつ高まっていたように思います。

３-８月：活動休止期間

３月に入り、大学の規定によって部活動の禁止を余儀なくされました。
すでにグラウンドを予約していた関係で、特例として少人数での活動が認められる期間も
ありましたが、緊急事態宣言下においては部員に会うこともなくオンラインでトレーニングを
行うこととなりました。また時間に余裕があるということで、部の活動体制について全員で
ミーティングをして考えていくことになりました。具体的には A チームと B チームに分けて
練習すること、週６日の活動に変更することについてです。コロナ対策としての人数制限、
リーグ戦開幕までの時間の短さを考えると、どちらも実行するのが合理的ではありますが、
70 人の部員がいれば意見が食い違うことも多々あり、最終的な結論を出すにはかなりの時間と
労力を必要としました。自分自身が全員と１対１で話し意見を聞く時間はなかったのですが、
各代の GM・主将から意見を聞き、最終的な決定は全員のミーティングにおいて発表と説明を
行うことで、できるだけ納得してもらえるように励みました。この体制変化によって長期的に
ア式がレベルアップしていくこと、組織としてより成熟していくことを心より願っています。

９- 12 月：待ちに待ったリーグ戦

８月の中旬から活動を再開し、９月５日から念願のリーグ戦が開幕しました。
リーグ戦までに行うことができたトレーニングマッチは１試合のみでしたが、手応えもありつつ開幕戦に臨みます。試合を通しては優位に進めたものの決定的なプレーの精度に欠け、残念ながら引き分けとなりました。この試合の結果が、残りの試合の奮わない結果につながったと強く感じています。チームがうまくいっている時は皆も笑顔で、サッカーも非常に楽しくできるのですが、やはり負けや引き分けが続くと雰囲気は暗くなり、自分自身も責任感を強く感じて思い悩むことが多くなります。休止期間の話し合いは何だったのか、その判断は正しかったのか、もっと他にできることはなかったのか、プレイヤーとしての自分は頼もしいか、色んなことを考え過ぎて夜も眠れない日がありました。大変なシーズンだったからこそ結果だけは掴み取って、笑顔で終りたいという想いは強かったのですが、それは叶いませんでした。己の力不足を感じ同期や後輩に対して申し訳ないことをしたと思っていますが、GM という立場で１年間喜怒哀楽を体験できたことは非常に有意義であり、今後の自身の人生において生かしていきたいと考えています。

これまでの 17 年間のサッカー人生とは、環境が全く変わったこの１年間は、
サッカーの楽しさと、当たり前にサッカーができることの素晴らしさを痛感するきっかけとなりました。戸田さんという素晴らしい指導者の元でサッカーができたことは勿論、外部からの視点も取り入れながら、従来の学生主体とは少し違う部活を追求できたことも非常に楽しかったです。
ア式蹴球部という組織において最後の学生サッカー人生に打ち込むことができ、共に戦った仲間やご支援、ご声援をいただいた OB・OG、父兄の皆様には、とても感謝をしています。
本当にありがとうございました。

現在もコロナウイルスの脅威は収まることなく、
後輩たちも満足には活動できていない状況だと思いますが、今年は小平グラウンドの人工芝化もあり、私にとってもア式蹴球部の活躍が楽しみな１年となります。土のグラウンドで活動していたからこそのア式らしさや強みを残しつつ、より戦術的で魅力的なサッカーを実現し、勝利を掴み取れるように頑張ってほしいと思います。今後ともア式蹴球部現役部員へのご支援、ご声援のほど宜しくお願い致します。

ア式蹴球部での４年間を終えて

雨宮 一郎 （４年）

12 月５日に引退し、そこから早いもので約２か月が経ちました。
この２か月間で、自分は夜更かしして海外サッカーを観ること、
ラーメンを食べること、遅い時間に起きて朝食兼昼食を食べること、遊ぶことなど
現役時代にやりたくても絶対に出来なかったことを沢山してきました。でも自分が感じたのは、
真剣にサッカーに打ち込めるア式蹴球部での日々が何よりも楽しかったということです。

色んなことがありました。
思い返せば、辛いことや苦しいことの方が多かったかもしれません。練習での自分のプレーや振る舞いを見て日々ストレスをためこんだこと、暑さに弱く体力が無かったので、様々な大学のグラウンドで捕食のおにぎりを吐いてしまったこと。そして特にコロナ禍による活動停止期間はつらかったです。４年として臨むア式最後の年に新しい体制となり、何度も仲間と部や活動に関する話し合いを重ねていた中での突然の出来事に呆然としました。このやるせない気持ちと就活時期の辛さが重なり、日々落ち込んでいた気がします。それでも部員全員が全力でサッカーに取り組むア式が大好きでした。それを活動停止期間に特に感じました。

この期間、フィジカル班は体力維持のため毎日部員にランメニューを提供してくれました。
加えてオンライン上で、毎朝顔を合わせてみんなで体幹トレーニングをするようになりました。
汗っかきのため自分の汗で部屋の畳が腐るのではないかと恐れ、体幹用のヨガマットを買うことになったのは大きな出費でしたが。

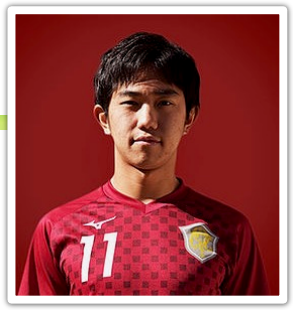
近所の公園にボールを蹴りに行くと、たまたま皆川（新３年）が
シャトルランを１人でやっているのを見かけました。住む地域が近いこの後輩もまた自主練をするための場所を求めて同じ場所にたどり着いていたのです。一緒に練習をしていなくとも
それぞれが同じ目標に向かって努力をしていることが嬉しく、何より自分も頑張らなければ
ならないと思うことが出来ました。活動再開はリーグ戦の１か月前という時期でありましたが、
自分はア式でまたサッカーをできることに強い喜びを感じ、どんな状況でも全力をつくそうと
ポジティブな気持ちを持って再開初日の練習を迎えることができたのを覚えています。

辞めたいとか、練習に行くのが辛いと思ったことは一瞬たりともありません。
また明日もみんなとサッカーできると興奮し、寝られなくなった夜も沢山ありました。
明日の練習が楽しみで寝られないなんて我ながら変わった人間だと思います。
それくらいア式という環境でサッカーすることが好きでした。３月 31 日に初めて練習に参加し、
その場で入部を宣言した４年前の自分の決断こそ大学生活の最適解だと思います。

一緒にサッカーをしてくれた先輩、同期、後輩には感謝しかありません。
隠し事なしで何でも話せる同期との関係性、ご飯に誘ってもらい、
おごってくださった先輩方の器の大きさ、慕ってくれる後輩、本当に好きでした。
そして現役の活動を日頃より支えてくださる OB・OG の皆様に、
この場をお借りして心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

これからは OB として活動を支援する立場となります。
現役の部員一人一人が「ア式という環境で過ごした４年間は最高だった」と思えるよう、
精一杯活動を支援していければと思っております。
サッカーから、ア式から離れて、改めてその素晴らしさを実感しました。

令和２年度シーズンの４年生



⚽ 負ける事と好きな事

木田 力斗 （４年）

最後の試合、自分はピッチに立てずに終わった。
怪我をしてから、そこに至るまでの心情はア式のブログに書いたので、
ここでは引退してから１ヶ月経った、今思う事を述べる。

１ヶ月以上経っても試合に出られないで終えたことは、自分にとって負けだと感じている。
この考えは時間が経っても変わらないのかもしれない。ただ、変わったことがある。
負ける事ができたということだ。怪我をした時、本当に辛くて目の前のことから逃げたくなった。
でも、戦うことを決めた。そして負けた。負けた事で辛くて逃げたくなった時でも粘れる強さを
実感し、自分の情けなさ、未熟さを知り、絶対に次は勝つという強い意志を得た。これらは、
逃げていたら得られなかったものばかりだ。

“逃げる事は負けられる機会すら失う”

今後の人生において、しんどくて逃げてしまいそうになる分岐点に幾つもぶつかるだろう。
逃げることも非常に大事な事だか、そこにまだ努力できる余地があるのなら立ち向かっていこう
と思う。何故なら逃げないで全てを懸けるという選択をした瞬間、あとは成長しかないのだから。

16 年間のサッカー人生を終え、思うことを述べたい。
自分は長い間サッカーに多くの時間を費やしてきたけれどサッカー選手になろうと思ったことは
ない。では、自分は何で色々なことを犠牲にしてまでもサッカーをしているのだろう。それは、
サッカーというものが好きだからだ。ボールを蹴ることも、試合に勝つことも、吐くまで走る
ことは嫌だったけれど、サッカーの全てが好きだった。正直、好きという理由だけでこんなにも
自分が１つのものに没頭し、努力できたということには驚きしかないし、自分のキャリアにも
影響を与えている。好きな漫画『ブルーピリオド』のシーンに、次のようなセリフがある。

“好きなことは趣味でいい。これは大人の発想だと思いますよ。
誰に教わったのか知りませんが、頑張れない子は好きなことがない子でしたよ。
好きなことに人生の一番大きなウェイトを置くのって普通のことじゃないでしょうか？”

だからこそ、自分は好きなことを職にした。
これは 16 年間サッカーをやってきたからこその選択だった。好きなことをやる事は、
いつでも楽しいって意味じゃない。サッカーをやってきても逃げたくなるほど辛い時はあった。
でも、それを凌駕するほどに熱量を注げてしまう。好きだからだ。
これからの未来、ワクワクしかない。

⚽ 普通の尊さ

瀬山 謙人 （４年）

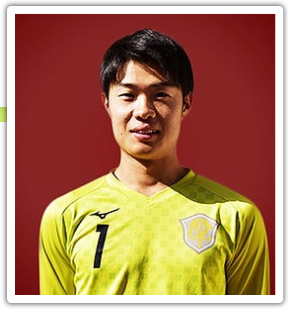
４年間で２度の長期間活動停止を余儀なくされた代ではありましたが、とても楽しくサッカーができたのはＯＢ・ＯＧの方々の支援あってのことだと強く感じております。大変お世話になりました。

１年と４年で活動停止を経験しましたが、
コロナ禍による活動停止は、当然ながら想いや過ごし方は全く異なるものでした。
関西遠征が終わり、いよいよアミノバイタル杯まで１か月を切るという３月の初めに活動停止になりました。当時は軽く考えていましたが、結果的には８月の頭まで活動を再開できませんでした。自粛初期の頃はジムが開いていたので毎日通っていまいましたが、間もなくしてジムも閉鎖となりフィジカル班からもらったメニューを１人でこなしていました。モチベションは低くなかったものの出来ることが余りにも限定的で、体力の低下はしょうがないかと思うようになりました。

６月後半あたりから、周りの大学が活動を再開し始めたという話を聞き、焦りました。
リーグ戦の日程が決まってからはチームの勝ち負け以前に、自分は出場できるのかという不安の方が大きかったです。感染者が再び増加し始めた８月頭に活動が再開できたのは、奇跡でした。同期とは、 ここで再開できなかったら引退か、という話まで出ていました。半分あきらめていた中で活動が再開でき、その勢いのままリーグ戦まで仕上げた１か月は、サッカーができる喜びを改めて感じた時間でした。最高学年として試合に出る自分がやらなければという思いで、あっという間に過ぎた１か月でもありました。自分がサッカーのプレーに集中できたのは、GMの健太や主将の拓実がチームをまとめ上げてくれたおかげです。

個人としては開幕１週間前にケガをしてしまい、１か月ほど遅れてリーグに復帰しました。
チームとしても１部昇格という目標が達成できなかったことは悔しいですが、戸田さんに来ていただいたり活動できなかったりと変化の激しかった今シーズンを、チームで戦い抜けたことは大きな経験だったと感じています。本当に貴重な４年間でしたし、ア式は本気でコミットする価値のある組織だったと思っています。ありがとうございました。

新しいスタート



中野 英司 （４年）

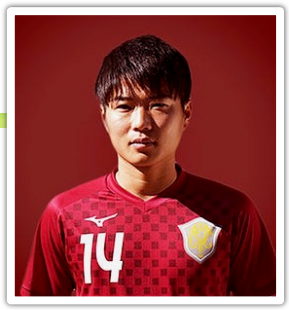
引退してから、はや２ヶ月が経とうとしている。
既にア式で過ごした生活が過ぎ去ってしまった過去であることを
ひしひしと感じる。あんなに毎日習慣付いていた生活のルーティーンがなくなり、食事も睡眠も
不規則になってしまった。体もみるみるだらしなくなっていく。練習漬けの日々を思い出し、
もうあんなに頑張れないなと心から思ってしまう。

５か月に及ぶ活動停止期間中はサッカーができず、リーグ戦があるのかどうかも分からないし、
何を目指せばいいのか分からない状況で精神的にしんどい時期もあったが、自分の時間が増えた
とポジティブに解釈することで、いろいろな事に目を向けてサッカーや部活のことを脇に置いた。
結果的にサッカーがしたいという気持ちは大きくなったし、その分停止明けは何も考えず練習に
打ち込むことができた。

なぜあんなにも練習に励み、いろいろな事を犠牲にしてまで頑張ってこられたのだろうと、
改めて考えてみた。それはやはりチームメイト、ア式のみんなの存在が本当に大きかったのだと
思う。苦しいトレーニングの時も、ジムで鍛えている時も、ご飯を選んでいる時も、絶えず
誰かチームメイトの姿が浮かんできた。これを食べたらあいつに合わせる顔がないなとか、
あと１セット頑張ればあいつに近づけるかなとか、頑張っている仲間がたくさんいるからこそ
自分も頑張ることができた。いい意味で緊張感を持ち続けながら生活をしていたのだろう。
チームに所属していることや目標に向かっていくことだけでなく、思い浮かぶくらいの仲間が
いたからこそ体験できる、その緊張感を味わえて本当に良かったと思う。

一方で、背負うものがなくなり組織から外れた今、本当の自分が見えてきた。
思い浮かべる仲間や目指すものがなくなってからは、意思の弱い、だらしない生活をしている。
こんなことではダメだと思いながらも、なかなかア式やサッカーの穴を埋められるものは
見つかっていない。私事になるが、今春から２度目の就職活動が始まる。自分が本気でぶつかり
続けて熱中できる仕事、自分にとって大切な人たちに巡り会えるように頑張っていきたいと思う。

最後になりましたが、いつも多大なるご支援とご声援をいただき、
応援してくださったＯＢ・ＯＧの方々、本当にありがとうございました。
不甲斐ない結果になってしまいましたが、
思う存分好きなサッカーに打ち込む事ができたと思っています。



想いの強さ

達　康大　（４年）

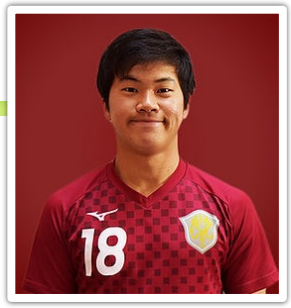
僕にとって大学サッカー最後の試合となった東京大学との国公立戦。
交代してベンチに下がり、少しすると、同期の太田と宮林がベンチに
下がって来て涙を流していた。自分も同じ試合を経験したのに、自分だけ泣いていない。
もちろん悔しいとは思うけど泣きそうになるだけで涙は出てこなかった。自分も強い想いを持って
試合に臨んだつもりだったが、２人はそれ以上に強い想いで臨んだ分だけ悔しかったのだろう。
別に泣いたからどうってことではないが、強い想いを持っていなければ泣くことはない。
それだけは言える。そして、自分は泣くほど強い想いではなかったということ。

そういえば、大東文化大学との新人戦の時も似たようなことがあった。
前の週の成城大学戦、スタメンで出してもらったにもかかわらず不甲斐ないプレーをして
スタメン落ちしたことで、どこか試合に集中しきれていなかったのかもしれない。
途中出場したものの、何もできずに敗れた。試合後の円陣で同期の GM 山本が号泣していた。
それだけあの試合に 懸けていたということだろうし、同じだけの強い想いで試合に臨めて
いなかったのだと思い知らされた。あんな気持ちで試合に臨んだ自分が恥ずかしいし、
チームのみんなに申し訳なかった。

その新人戦から２年、成長していると勝手に思い込んでいた。
B チームの円陣で偉そうに“人として成長してほしい”とか言ったけど、そう言った自分が
人間として成長していなかった。昨年の関西遠征後に「覚悟」というテーマでブログを書き、
自分に言い聞かせてきたつもりだったけど足りなかった。

これを読んでいる後輩、特に B チームにいる後輩には、
まず自分の心の底から叶えたいと思える目標を立ててほしい。リーグ戦で点を取るでも、
今年のリーグ開幕戦でスタメン出場するでも何でもいい。その目標を叶えたいと強く想い続ける
ことができれば、もし叶わなかったとしても間違いなく成長できる。円陣で何回か言ったけど
B チームで一緒に頑張った選手が１人でも多く今年のリーグ戦に絡むことを期待しています。
そして、自分たちが叶えられなかった１部昇格を成し遂げてください。最後になりますが、
４年間本当にお世話になりました。ありがとうございました。

⚽ ４年間を終えて



八田 健吾 （４年）

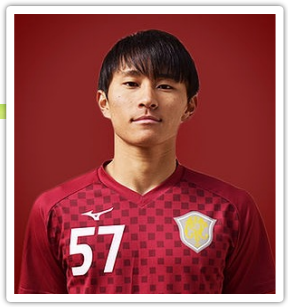
とにかく自分自身にフォーカスした４年間でした。
《試合に出たい》、《上の舞台に行きたい》という自分の結果だけを
考えるあまり、周りの人への配慮が欠ける、自分中心の選手だったと思います。
しかし自分自身と向き合うことはできた、そんな４年間だったと引退した今は思っています。

コロナ禍による活動停止期間、私はサッカーや部活に対する自分の考え方を変えました。
それまでは、SB の私が試合に出るには、ポジションが被る選手間の中でトップにならなければ
ならないと思っていました。例えばレギュラーの SB が技術系なら、その選手の技術を上回る
必要があるというように。しかしながら、物理的にサッカーができる時間が少なくなったため、
《違った特徴を出し、レギュラーではなく１分でも試合に出る》という考え方に変えたのです。

就職活動と並行して、筋力や筋力などフィジカル面を鍛える練習を増やしました。
１日４～５食に変えて筋力トレーニングを行い体重を８キロほど増加させました。これによって
対人を強くすることができましたが、サッカー脳の部分では何かが足りないと思い、それを補い、
また出てくる課題に取り組む。そういったことを繰り返し行いましたが、結果としては何も成し
遂げられませんでした。短い期間で最大級の結果を求める傲慢な考えでした。それでも、自身の
至らなさを知ることができた有意義な期間であったと、今は考えています。

組織としては、Zoom ミーティングやオンライントレーニングのみの交流だったので、
後輩を気にかけることができませんでした。そのため活動が再開してからは、入部した１年生も
含め《練習はどれだけやっても足りることはない》、《自分と同じような選手を生みたくない》、
この２点を言葉ではなく、練習を通じて後輩たちに伝えられるよう常に意識しました。
《自分では頑張ってやっているように思える練習も、相手に勝てなければ何の意味もない》、
自分自身が４年間サッカーをやってきて感じたことを、練習以外の場でも、間接的にでも伝わる
ように心がけてきました。その結果、後輩が声を張り上げ高い意識で練習に取り組む姿を見た
時は嬉しく、苦しかった部活動を楽しく感じることができました。小さな取り組みですが、
その小さな意識の変化が組織を変えることができる、そんな実感を得られた最後の１か月だった
と思います。

僕の今後の人生、サッカーを続けるか、新たに挑戦したいことができるのか、
どうなるか全くわかりません。ですが、どんな物事も楽しまなくては意味がない、そう思います。
今後の人生、サッカーと同じように「楽しむ」ことを忘れず、挑んでいきたいと思います。
最後になりますが、多大なるご支援をいただいた OB の方々、４年間を共に過ごした部員、家族、
そして関係者の方々、本当にありがとうございました。



⚽ ア式で得たもの

林 遼太郎 （４年）

コロナによる活動停止は３月から８月初旬までだった。
この期間は個人の能力を伸ばせるだけ伸ばそうと筋トレや体幹に加え
ランニングを行った。特に筋トレを重点的に行い、当たり負けしない体を作ろうとした。
何としても個人能力を維持し、来たるリーグ戦で活躍したいという思いであった。
しかし、リーグ戦が始まる直前は去年までのリーグ戦と異なり、自分としては緊張感が余りない感じだった。長い休みを挟んだこともあり、これからリーグ戦が始まるという意識や高揚感も感じなかった。

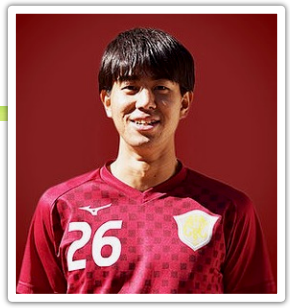
このコロナ禍の中、サッカーもできず外出もできず悶々として過ごしていた３月頃、
ふと考えたことがある。なぜ自分はア式に入っているのだろうか。

自分は当初クリムゾンとア式どちらに入部するか本気で迷っていた。
アメフトのあの猛々しさや筋骨隆々とした人たちには憧れを抱かざるを得なかった。
しかし、結局ア式を選んだ。なぜだろうか。考えた末に自分なりの 答えは見つかった。
自分はア式の人間が好きだったんだと。

練習の荒々しさや試合の一体感、ピッチ内の雰囲気、オフの日の関わりや授業、
全てにおいてア式の人たちだからこそ、あれらは成立したんだと思った。
多分ア式の人たちが皆アメフトをやっていたら、自分は今頃アメフト部に所属していただろう。
それくらい自分はア式の人間が好きなんだとようやく気づいた。

練習試合や練習で活躍できなかった日も、うまくいった日も、
カテゴリーが上がった日も、リーグ戦に出た日も、リーグ戦で戦犯になった日も、
いつも周りにはア式の人たちがいて支えてくれて、苦楽を共にした。
ア式に４年間所属することで、こんなにもたくさんの仲間に巡り会うことができた。
これこそがア式の最大の良さだと思う。
ア式の人間でしか作れない雰囲気、その雰囲気を好きな人たちが、さらに集まる。
こういう組織に所属できて本当に良かったと強く思う。

ア式を支えてくれた方々、自分に関わってくれた方々、本当にありがとうございました。
特に同期には支えられました。この同期だったからこそ、サッカーを最後まで
楽しむことができたと心の底から思っています。皆さん、本当にありがとうございました。



⚽ 最後の１年に考えたこと

松田 悠太郎 （４年）

３月から８月までの半年弱の期間、チーム全体としての活動が
できませんでした。４年生の自分としては大学生活をかけて取り組んで
きたことが、その成果を最大限に発揮できず心残りではあります。しかし、この最後の１年間は多くの意味で今後につながるものを組織としても個人としても得ることができました。と同時に月並みではありますが、当たり前の日常のありがたさを実感することができたと思っています。

個人的に言うと、この自粛期間はチームのフィジカル担当として、
どのように家でトレーニングを続けるか戸田コーチや同じフィジカルユニットの皆と考えるなど、少しでもチームに貢献できるように模索する期間でした。全員がサッカーはおろか会うことさえ許されないこの期間にア式に対して何かできることはないかと考えた経験は、そういう意味では無駄ではなかったかもしれません。

８月に活動を再開してから引退する１２月まで、
ようやく味わうことができた日常は一瞬のごとく過ぎていきました。もちろん望んでいた結果に到達できなかったので満足はできませんが、申し訳ないですけど、個人的には同期や後輩たちと時間や感情を共有できることが楽しくて充実していました。健康的な生活ができ、夢中になってサッカーができること、そんな当たり前だと思っていたことに感謝し、日々を大切にしながら過ごすことができました。トータルで見れば、これまでにない非日常によって被った不利益の方が圧倒的に大きいと思います。ただ非日常のおかげで、これまでは見えていなかったものと向き合うことができたのも事実です。これから社会に出ていく上で、そういう普段は見えないものを大切にしていきたいと思います。

OB の方々のサポートも、意識しなければ見えにくいものの１つです。
おかげさまで４年間部活を、サッカーを楽しむ事ができました。本当にありがとうございました。
思えば、大学までサッカーを続けられたのは不思議なことのような気がします。全く想像していませんでした。自分は中学３年の時にプロになることを諦めました。それでもやめることなく大学に入ってもサッカーを続け、気がつけば引退を迎えていました。本当にこれで良かったのかと悩んだこともありましたが、一番やりたかったサッカーに必死で取り組んだからこそ未練なくサッカーと決着をつけることができたと思っています。

今、自分は猛烈に勉強しています。まるで４年間のツケを払うかのように。
毎日、１日中机と向き合っているのですが、日々成長を実感し勉強が楽しくてたまりません。
今やりたいことができるという人生最大の贅沢を存分に味わっています。５月８日の
公認会計士試験に必ず合格するという決意を、ここで表明することで締めようと思います。
最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

⚽ サッカーができる幸せ

ヘルバート 弥呂 （４年）

OB の皆様、４年間ご支援いただきありがとうございました。
本記事では、引退後の生活について記述します。拙い文章ですが、
お目通しいただけますと幸いです。

まず引退後の日々についてですが、引退後の毎日は単調に過ぎゆきます。
食事ラインはもう存在せず、何時に起きるのも自由です。起きてから朝ごはんを食べない日もできるようになりました。朝練の用意に追われることはなく、寒い中、自転車を走らせることもありません。練習後チームメイトと食べていた昼食は、家で１人で済ませるようになりました。その後もこれといってやる事はなく毎日が無機質で単調です。部活中に時間ができたらやろうと思っていたことはまだ何１つしていません。改めてサッカーやア式蹴球部が自分の人生の中心であったと実感しているところです。

現役生活は、非常にかけがえのない時間でした。
サッカーという領域で勝利やリーグ昇格という普遍的な目標が持てたことは非常に貴重だったと、引退しえてそれを持たなくなった今だからこそ感じます。 目標に向かえた程度の差はあれど、近づいているという意識を持つことはできていました。将来においても、この目標意識を持てるようになりたいと考えます。社会人になることに若干の不安を感じるのは、目標意識を持てるかどうか自信がないからかもしれません。日本のため、会社のため、あるいは家族のため、将来はどんな目標を持って働くことになるのでしょうか。その目標にどれだけ向き合えるのでしょうか。不安な反面、また再び部活のように１つのことに夢中になることができると思うと、楽しみな部分もあります。

最後になりますが、改めて OB の皆様にはご支援頂き誠にありがとうございました。
日頃のご支援から人工芝化まで、自身が所属した４年間だけでもサッカーをする環境が、飛躍的に向上しました。今後は、そうした目標を達成しようと奮闘する現役部員を、OB の一員として見ていくことができるのが楽しみの１つとなっています。

感謝

名徳 泰地 （４年）

大学４年間、今振り返ると、理解できないくらいに細部にまでこだわり、
サッカーと向き合った時間だった。朝早い練習で、朝５時に起きる。
そんな中でも睡眠時間を確保する為、11 時には寝る毎日。朝ご飯は白米、納豆、卵、ベーコン、
サラダ、ヨーグルト。揚げ物は月に１度ほどしか食べず、お酒もほとんど飲まない。半年ほど
グルテンフリーをし、パスタ、パン、うどんなど小麦を全く食べない時期もあったほど。

貴重なオフは次の練習のパフォーマンスを上げるためのリカバリーの時間。
遊ぶといえば温泉くらい。サッカーの試合を見ていても、純粋に楽しんでいる時間は殆どなくて
ポジショニングとか、戦術とか、考えてばかり。これらは自分にとって本当に当然のことだった。
辛いなと思うことは殆どなく、強いて言うなら朝５時に起きることくらい。でも引退した今、
そんな生活をすることは二度とできないと感じる。夢でも見ていたんじゃないか、
夢じゃなきゃやってられない、それくらいのこだわりを持っていたのだと。

きっと、そんなことができていたのには様々な理由があって、
自分だけで成し遂げられたものじゃない。部活で同じ時間を過ごした先輩たちは厳しく、優しく、
楽しく接してくれる中で、大学でのサッカーの基準を教えてくれた。後輩たちは常に自分に
緊張感を与え、模範でありたいと思わせてくれたし気を引き締めさせてくれた。同期のみんなは
切磋琢磨する中で、サッカーで巻き起こる様々な感情を何倍にも増幅させてくれた。

OB の方たちはア式を常に支えてくれていて、そのことを日々感じる瞬間があり、
責任と自覚を持って部活に取り組むことができた。本当に、本当に、たくさんの人たちの
真剣な気持ちとぶつかり合う中で、奇跡とも言えるような４年間を過ごすことができていた。
感謝しかない。当時とは 180 度違う、しょうもない毎日を送っている今の自分だが、
この感情だけは全く変わらず持ち続けられている。本当に幸せだったんだなぁと、
いや、幸せなんだなと感じる。ありがとうございました。

⚽ 挑戦を終えて

木村 映美 （４年 MGR）

この度引退致しました、４年マネージャーの木村映美です。
保護者、OB、OG の皆様方には日頃から多大なるご支援をいただき、
感謝申し上げます。戦いを終えてというテーマですが、私にとってはア式に入ったこと、
それ自体が戦いでした。戦いというより挑戦といった方が正しいかもしれません。

高校生まで、音大に入ってピアニストになりたいなんて思っていた私にとって、
一橋大学に入ることは大きな方向転換でした。ご想像の通り、部活や体育会とも無縁でした。
ア式蹴球部に入部するという選択も大きな挑戦でした。無知で好奇心に溢れる１年生だったから
できた決断です。当然のことながら、体育会の厳しさ、組織に所属する難しさに直面しました。
毎練習が戦いでしたし、入部してしばらくの間は仕事をこなすことで手一杯で、部活を素直に
楽しむなんて余裕はありませんでした。それでもめげずに毎練習、毎試合をこなしていくうちに
不思議と自分なりの仕事のやり方、コツのようなものを見つけ、それと同時に周りを見渡す余裕の
ようなものが出てきました。継続は力になるようです。それからは部活の楽しさや達成感を感じる
機会も増え、総じて充実した４年間だったと思います。私が部活を嫌にならずに投げ出さなかった
のは同期のプレーヤーの頑張る姿、活き活きとプレーする姿に鼓舞されていたからだと思います。
私も同じように活き活きと部活に励みたいという思いがありました。

コロナ禍による活動停止期間中も、マネージャーはオンラインでミーティングを行い、
変更になった大会規則を全員で確認したり、コロナ対策をしながら練習を回す方法について
話し合いました。食事ラインも継続し、熱中症対策などの食事についての情報発信を定期的に
行いました。８月になって活動が再開した時はリーグ戦に参加できることが当たり前のことでは
ないと強く感じ、参加できることを素直に嬉しく思いました。マネージャーとしては、選手が
いつも通りの力を発揮できるよう、これまで以上に気を配り、マネージャーはもちろん選手との
コミュニケーションも積極的に取って意思疎通を図り、仕事に取り組みました。

４年間この戦いに挑み、得られたものはたくさんありますが、
その中でマネージャーとして身に付いたことをあげます。それは自分に何を求められているのか
瞬間瞬間に分析し相手のニーズを察知して行動する力です。この意識が欠けるとマネージャーの
仕事は誰がやっても同じ形式的な仕事に成り下がってしまうと思います。その仕事に自分なりの
気づきを反映させること、そして相手の状況を理解する想像力が身に付いたと思います。
これからはア式で学んだことや経験したことが自分には不可欠だと言うことができるように、
４年間で学んだこと、感じたことを糧にして、臆することなく挑戦を続けて参りたいと思います。

令和３年度シーズンに向けて

⚽ 再出発

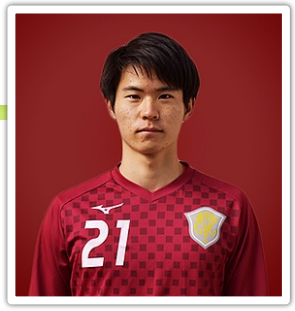
北西 真之 （３年 新主将）

平素より私たちの活動に、ご理解とご協力をいただいていることに
感謝申し上げます。サッカー黎明期とされる 1921 年に創設され、
日本サッカーの躍進に大きく貢献してきた我が一橋大学ア式蹴球部も、今年で創設 100 周年という大きな節目を迎えます。この記念すべき年に主将という責任ある立場を務めさせていただくことを真剣に受けとめています。

昨年は新型コロナウイルスが蔓延し、社会的混乱に見舞われるなどサッカーができることが
当たり前ではないことを改めて認識することになりました。やっとのことで迎えることができたリーグ戦も東京２部リーグ６位と悔しい結果となりましたが、今年も変わることなく１部昇格を目標に掲げています。１年次からリーグ戦に出場させていただいているため東京都１部リーグに昇格することが、いかに難しいことかは十分に理解して います。この目標を達成するためには部員全員がより一層の熱量で部活に打ち込むことが必要です。主将として、率先してその姿勢を示していくつもりでございます。

今年の４月には OBOG の皆様のご支援により、人工芝グラウンドが竣工します。
土のグラウンドで顔に泥をつけながらサッカーをすることがなくなると思うと、ほんの少し寂しい気持ちもありますが、新しいグラウンドが完成するのを今か今かと待ち侘びています。
同時に、このような贅沢な環境を整えてくださった OBOG の皆様への感謝の気持ちは、
１部昇格という結果をもって示さなければならないと身が引き締まる思いが致します。

１月末の OB 総会は、新型コロナウイルス第３波の感染拡大を踏まえて、
オンラインでの開催となってしまいました。新型コロナウイルスが収束しましたら、OBOG の皆様に日頃のサポートに関する感謝の言葉を直接お伝えさせていただければと思っております。
先を見通しづらい状況ではありますが、ご自愛のほど心よりお祈りしております。



⚽ 躍進の年に！

七條　拓　（３年 新 CM）

いつも多大なるご支援、ご声援、本当にありがとうございます。
我々は今シーズンの目標として、３年ぶりの１部昇格を掲げています。
自分がこれまで在籍してきた３年間では成し遂げることのできなかった、またそのチャンスすら得ることができていなかった１部昇格という目標に、もう一度チーム全員が本気で向き合い、結果を残す１年間にしたいと思っています。

今シーズンの４月には、多くの OB の方々の協力と支援のおかげで、
小平に人工芝グランドが完成する予定です。新しい人工芝のピッチで日々練習ができること、ホーム会場でリーグ戦の試合ができることの幸せを完成の前から感じております。現在は遠方のグランドを毎日２会場借りて活動していますが、小平に人工芝のグランドができれば、その必要もなくなり自分たちが理想とする時間で練習ができる。また好きなだけ朝練や居残り練習ができる。練習前にスクリーンを使って、その日の練習についてのミーティングができる。また別会場ではどうしても交流が少なくなってしまう A・B チームの交流も生まれる。部員たちは昨シーズンの段階から人工芝グランドの完成にワクワクしながら、そこですべきことを今から考えています。

昨シーズンから外部コーチとして関わっていただいている戸田和幸さんにも、
今シーズンはサッカー面においての監督としてチームに関わっていただきます。OB の方々からいただいた小平の人工芝グランドを最大限活用し、これまでのア式より進んだ取り組みした上で進化したサッカーをリーグ戦の舞台で見せること、その上で１部昇格という結果を掴むことを目指し、１日１日を大切に部員一同活動していきます。コロナ禍による影響が落ち着きましたら、是非、新しくなった小平グランドに足を運んでいただければと思います。これからもご支援、ご声援のほど何卒よろしくお願いします。

⚽ 主体的に行動すること

佐藤 由都 （２年）

大学に入学してからすぐに気づいたことは、自分から主体的に
行動しなければいけないということです。中学や高校の時は登校や
下校の時間が決められていて、自分から行動を起こさなくても、やらなければいけないことがしっかりと決められています。しかし大学になると自由な時間が増え、活動の幅も自然と広くなるため、自分でやりたいことを明確にして積極的にアクションを起こさなくてはいけません。勉強に関しては正直に言って高校の時に頑張ったから、大学の講義にそこまで興味が沸かない、というように色々と言い訳をつけ入学してすぐに勉強に力を注ぐことを諦めました。また大学の講義で科されるレポートなども完全に受動的にやってしまっているので、勉強よりも高校の時にそこまで本気で打ち込めなかった部活に力を入れようと決めていました。

言うまでもなくア式蹴球部は「学生主体」の組織であり、自分がどのような選手になりたいか、何をするべきなのかを自分で考えて行動しなければいけません。私がア式蹴球部に入ったのも「学生主体」という言葉に魅力を感じたからです。高校までは監督の言うことに従い、時間にも制約があったので、私はサッカー面に関してあまり主体的な行動を起こしていませんでした。ア式に入部してからは、スタメンで公式戦に出場するという自分自身の目標を定めていたので自分に足りないものは何か、何を自分のストロングポイントとしていくのかなど色々と考えることが多くなりました。

コロナでの活動停止期間は全体での練習ができない状況だったので、
家の近くの公園でランニング、ジムでフィジカルトレーニングをメインに行っていました。また、ズームを使ったオンラインのトレーニングやイベントを通じて他の部員とコミュニケーションをとる機会もありました。活動が再開したのはリーグ戦が始まる約１か月前で、全体でのボールを使ったトレーニングができていない状況だったので、果たしてリーグ戦でしっかり戦えるのかという不安が大きかったです。戸田コーチの指導のもと初めてAB２チームに分かれて練習をする不安もありました。私はAチームでした。新しくやることが増えて戸惑うことが多かったですが、繰り返し同じトレーニングをすることで徐々に慣れていきました。また戸田コーチは戦術などをとても理論的にわかりやすく説明してくれるので、相手を見ながらしっかりとプレーすることを身につけることができ、リーグ戦では第１節の成城大学戦からほとんどの試合で出場できました。

今年になって「スタメンで公式戦に出場する」という入部当初からの目標を
初めて達成できたということもあり、今ではサッカーが非常に楽しく、モチベーションも高く練習に取り組めています。また部員にもサッカーに熱心な人が数多くいて環境にも恵まれたなと思います。サッカー面で主体的にできているように、勉強面でも、まずは将来何をしたいかなど具体的な目標を定め、行動を起こしていこうと思っています。

ア式生活１年目

善養寺 峻史　（１年）

光陰矢の如しとはよく言ったもので、ア式蹴球部に入部してから
早くも１年近くが経とうとしています。昨年３月、降り仕切る雨の中、
傘を差しながら見に行った合格発表は今でもよく覚えてます。浪人という長い冬を経て掴かみ取った合格は、私にとってかけがえとないものとなりました。長かった受験から解放され時間を浪費していた私は来たる大学生活に想いを馳せつつ、半ば恍惚としながら一橋の部活、サークル紹介の冊子を見ていました。大学生活において部活やサークル活動の与える影響力は計り知れないもので、どれを選ぶかで大学生活の良し悪しが決まります。私の目に止まったのはア式蹴球部とサッカー関係のサークルで、小中高とサッカーを続けていた私にとって、それは必然でしたが、大学でサッカーを続ける意味を探しあぐね、非常に迷いました。そして悩みに悩んだ挙句、“やるなら本気で”と思い５月頃にア式蹴球部に入部することを決意しました。しかし新型コロナウイルスの感染拡大の影響で部活動は停止となったため、当面の活動は zoom で行われ、どこか入部した実感のないまま過ごしていました。

部活の中断期間では、主に zoom を利用した体幹トレーニングが行われました。
各学年 2〜3 人で構成される小グループに分かれ、上級生の指導の下、身体の様々な部位に焦点を当てながら行われました。また個人としては、体力の維持と増加を目標としてランニングなどをしていました。一方で食事ラインも継続して行われ、最初は食事を摂る時間や食事のバランスなど注意事項が多くて慣れるのに苦労しましたが、体幹トレーニング同様、上級生の指導を受けて徐々に慣れていき、活動停止期間を有意義なものにすることができました。

８月初旬、新型コロナウイルスの感染が縮小し、ようやく活動が再開されると、
入部以降初の全体練習が行われました。多少の緊張と不安を抱えつつ臨んだ初練習は、想像とは全く別物でした。特に先輩たちのサッカーに対する真摯な姿勢は新鮮で、非常に感銘を受けると同時に今後のア式生活に不安も感じました。秋のリーグ戦の開幕まで１ヶ月しかないという中、学年関係なしに全員が高い集中力と良い緊張感を持って日々練習をしていました。

ア式蹴球部は学業との兼ね合いから練習時間が朝方になることが多いため、
当時千葉に住んでいた私は、練習時間次第では４時台に起きることも珍しくなく、眠い目を擦りながら満員の総武線で練習に通っていたのは、今思えばいい思い出です。夏以降、練習や試合を重ねていくにつれ次第に部の雰囲気にも慣れていき、同級生や先輩達とも良い関係を築けたので、今では良い環境で活動することが出来ています。４月から２年生となり、ア式での立ち位置も変わることが予想されますが、常に自分にベクトルを向けて活動し、部生活を楽しみたいと思います。

⚽ 今までの振り返り

向井 友紀　（1年）

入学から約９か月、特に何もなかった気がしますが、
せっかくですので振り返ってみようと思います。まずは入学直後、
コロナが蔓延して地方の自宅で自粛生活を送る形となり、すぐにオンライン授業が始まりました。
実際に大学に通っていたら大変だったろうなと感じました。同時期にア式蹴球部の新歓があり、
入部を決めました。入部の意志をパーセントで表す風習があると思いますが、新歓の zoom
ミーティングで自分の意志を問われた際、前に答えた人全員が 100%と回答していくので、
自分もつられて 100%と答えてしまったことを今でも覚えています。もちろん後悔していません。

８月、部活動が再開されると、そこから週６日、サッカー漬けの日々が始まりました。
サッカーに没頭するのが大学生活なのかと考えこんでしまう時もありましたが、素直にやりたい
ことに打ち込めるのはすごく良いものだなとつくづく思います。自分は一人暮らしをしている身
であり、やはり自炊がネックとなりました。モチベーションが高かった初期には数多くあった
料理のバリエーションは、２つにまで減少してしまいましたが、栄養をバランス良く摂ることは
何とか意識してきました。

数か月して生活のペースを何となく掴んだ頃に、バイトを始めようと思い立ちました。
ロイヤルホストに２度申し込みましたが、２回とも不採用を言い渡されました。
社会は自分が思っているより厳しい場所なのだと悟りました。
ただその後、松屋のデリバリーという最高の職にありつけたので恨みはありません。

８月から約５か月間このア式で活動してきて、どのような組織か理解し、
仲間と関係性を築くことが出来たと少なくとも自分は思います。ここまで書いてきて、改めて
感じるのは自分の生活はサッカー中心だったということです。そして、それはこれからも続くと
思います。ア式の活動を通して個人として成長しつつ、その他の様々なことに触手を伸ばして
色々な事を経験、吸収できる大学生活にしたいと思います。

Coca-Cola
Coca-Cola

Nazoo

14

⚽ コロナ禍インドでの奮闘記

高橋 良多　（昭 51 卒）

ナマステ。私は 1976 年に卒業後、三菱商事で 33 年間勤務し、2009 年に関西ペイントに再就職。2018 年に縁あって大紀アルミニウム工業所にお世話になり、2019 年 12 月、南インドのアンドラプラディッシュ州スリシティという田舎町に赴任して来ました。アルミ２次合金製造会社の立上げで、既に工場は建設終盤の段階で機械設備も８割方入って来ており、2020 年３月末の生産トライアルを目指していました。敷地内の新事務所はまだ完成まで至っていなかった為、私は取り敢えず工業団地の入口にある汚い建物の１室を仮事務所として借り、駐在員私１人とインド人従業員８名、及び日本からの長期出張者３名（全て建屋と機械設備関係者）でインド生活をスタートさせました。

新会社の生産立上げは、武漢に端を発した新型コロナウィルスにより甚大なる影響を受けました。工場建屋の建設がインド人作業者が集まらずに遅れたことは勿論ありますが、重要な設備であるアルミ溶解炉が中国製で据付を行なっていた中国人が、春節で一時帰国した１月に中国がロックダウンし２月になってもインドに戻れなくなったのです。さらにインドでも感染が拡大し、３月 25 日にモディ首相が全土のロックダウン宣言を発出。この時、溶解炉オイルバーナーを担当するインド人たちが北部インドなど遠方の出身地に帰っていて、感染を恐れた彼らが戻らなかった為、作業が全く進まなくなってしまいました。中国メーカーとは通訳を介して WEB 会議を開き、据付のポイントを１つ１つ確認しながらの作業を続けましたが、ようやくオイルバーナー業者が作業を再開できたのは７月になってからで、人数も非常に少ないため挽回がままならず、結果として 約５ヶ月の立ち上げ遅れとなってしまいました。

９月半ば、インドのコロナ感染は１日 10 万人近くに達しました。
ブラジルを抜き米国に次ぐワースト２です。流石にその時は、“臨時便が飛べば日本に帰りたい”と真剣に考えました。しかしながら立上げの遅れは、逆に我々にとってラッキーにも追い風になりました。４月からの約５か月間、インドを始めアセアン等の自動車産業は生産停止や縮小を余儀なくされてきたので、遅れての生産立上げとなった 10 月には市場のお客様からアルミ２次合金の引き合いがどんどん入り、嬉しい悲鳴となったのです。

工業団地内の野原にて
遠くに野良の牛が見える

ロックダウン中での日常生活についてですが、州境が封鎖され、車で片道２時間かかる大都市チェンナイまで買い出しにも行けず、4～5 ヶ月は籠城生活そのものでした。居住地内の村の繁華街に野菜や鶏肉を売っている粗末な店舗や路上市場はありますが、衛生面で、とても問題がありそうでした。が、日本から持ってきた乾物や缶詰も底をつき仕方なく近所で仕入れた卵や野菜を食べていた時期は、流石に心が折れそうでした。現在は州境越えが可能になり、往復４時間ですが、チェンナイにてショッピングとレストランでの食事を楽しむことができるので、少し通常生活に戻ってきているところです。また Zoom という便利なツールのおかげで、大学サッカー部の仲間 4～5 人とは月に１度インド・米国・日本・を結び、３拠点 WEB 飲み会をやって楽しんでいます（時差のせいで、お酒ではなくコーヒーの人もいますが）。 2021 年は新型コロナと共存しながら、且つ他の風土病にも掛からぬように気をつけながら生産販売拡大に向け尽力して参ります。以上インドより、高橋がお伝えしました。

＊居住地内タダ村の繁華街＊

2020 年 5 月 ロックダウン中

2021 年 3 月

Daiki India 従業員と懇親会

高橋

“こちら、ヒューストン！”

篠崎 信弘　（昭 52 卒）

昨年の大統領選挙から今年初めの議会乱入騒ぎ後は、毎日の新規感染者が全米で 20万人、テキサス州で２万人、ヒューストンがあるハリスカウンティで２千人を記録していたが、ここのところ少し落ち着きをみせ、2月20日現在の数値は、それぞれ約７万人、５千５百人、４百人と激減している。もっとも２月14日夜から３日間にわたりテキサスを襲った大寒波で、人の動きがほとんど止まったことも大きな原因と想像する。2月20日現在の感染者関連の数値を下記しておく。

	感染者累計	2/20 新規感染	死者累計
全 米	28,100,000	69,740	500,000
テキサス州	2,590,000	5,532	40,000
ハリス郡	340,000	392	4,800

注1）ハリス郡は、東京都の約1.7倍の面積に460万人が居住

注2）テキサス州の死者約４万人の内、75歳以上が約２万人で、65歳以上の合計は２万９千人

アメリカが他国に比べ感染者が多い最大の理由は、トランプ政権がこの病気を過小評価し、海外からの入国管理のタイミングを間違ったことから始まる。日本人のように子供の頃から風邪が流行りそうだったらマスクをする、外から帰ったら手を洗いウガイをするという習慣が、この国に欠けていることも大きな原因。現在州政府の指示でバーは閉店、レストランはキャパの50%までの集客しか認められていないが、レストラン内のバーは堂々とオープンしているし、50%基準を誰もチェックしていない。レストランによってはこの基準を超えているところもある。更にテキサス人は集まって呑み喋るのが大好きな人達であり、週末に限らず家の前に車が何台も駐車しているのをよく見かける。私は昨年9月に引退したが、在籍中に社長が社内でマスクをしていなかったので、“した方がいいよ”と言ったら、”That is none of your business”という言葉が返ってきたのを覚えている。“自分は大丈夫”という全く根拠のない自信も、感染拡大に寄与しているところがあるかも知れない。

２月17日、65歳以上の高齢者枠で、私と家内はコロナワクチンの１回目の接種を受けてきた。ファイザーとモデルナだが自分ではどちらを接種するかの選択権はない。私のホームドクターがいる病院、Houston Methodist Hospital の事務所に電話を入れ、“自分は脳梗塞・前立腺癌等を経験しており、できるだけ早くワクチン接種を受けたい”と申し入れたところ、その３日後には電話が来て予約の確認をするテキストも届く。

ワクチンの接種場所は病院に付属する、まるで巨大な体育館のような、だだっ広い施設だった。
本人確認の後、列に並んでいると係の人がファイザー口とモデルナ口に振り分けていた。我々はファイザー口に招かれ「長〜い針」の注射器で上腕の筋肉の深くにチクリとやられた。多少痛いがインフルエンザの予防接種と、さほど変わらない。接種後に看護師が、どのワクチンを何時に接種したかとその15分後の時間を書いたカードをくれ、別のコーナーで待機。100万人に１人の割合で即座に拒否反応が出る場合に備えてだが、我々は問題がなく自分で運転して帰宅した。当日の夜は上腕部の筋肉が多少固くなり、腕を上げにくかったものの、ひと晩で解消した。

２回目の接種は、3月10日。
昨日の日経電子版によると、１回目の接種の効果が表れるのに２-３週間かかるが、感染防止率は65%あり２回目の接種を終えた２週間後には95%まで上がる由。また１回目の接種率を上げる為、2回目との間隔を意図的に広げ、多くの人に少なくとも１回は接種させるようにしているという。

ワクチンの接種場所
Houston Methodist Hospital の付属施設

２回目の接種は１回目よりチョット痛く、
左半身が少しだるかった。
２週間後には効き目が出るそうで、
まずは一安心。

２月中旬にテキサス州を襲った大寒波についても記しておく。
ヒューストンに住んで 34 年半になるが、ここは屋久島と同じ緯度の亜熱帯地域で、こんな寒波は本来あり得ず、経験することのなかった寒さを味わった。まず 14 日の夜から始まった寒波で 15 日の午前２時半に停電。家で唯一の「暖」は１階の暖炉のガスストーブで、これは娘と孫たちが優先。ガスコンロはマッチで点火できるが換気扇が停電で使えないので、孫たちへの二酸化炭素の影響が心配で短時間しか使用できなかった。

復旧したのは 16 日の午前 10 時半。この間の 32 時間の気温はマイナス９度。
丸１日暖房のない状態から突入した 15 日夜の寒さは半端なく、ほとんど眠れなかった。そして 17 日、寒さがマイナス１度まで緩み、凍結していた路面も溶け、多少は車で動ける状態まで回復したのだが、今度は給水制限が始まった。寒波により、あちこちで水道管が破裂したのが原因。しかも水質が極端に落ち、煮沸後でなければ飲むなと市から通告が出る始末。これでシャワー、皿洗い機、洗濯機の使用が不可となり、トイレもバケツに貯めた水で対応せざるを得ない状態が続く。この騒動がようやく終息したのは、２月 20 日だった。

こちらでは何も報道されていないが、日経電子版によると停電の原因は、
寒波による電力不足を予測していた州政府の「計画停電」となっている。ハリケーンハーヴィの時にも、30 年間開けたことのない水門を開けたことが多くの家屋に床上浸水をもたらしたという「人災」の話もあり、ひょっとすると今回も「人災」の部分があったのかも知れない。さらに 23 日の同新聞の記事には、大雪でワクチンの配送が遅れ、20 日までの１週間で約 100 万回分のワクチン接種ができなくなった恐れがあると書かれている。今年もコロナと異常気象に悩まされる１年になりそうである。以上ヒューストンより、篠崎がお伝えしました。

ダラス郊外

オースティン市街

⚽ スペインのコロナ状況

岩田 淳一　（昭 58 卒）

スペインではコロナウイルス第三波が襲ってきており、2020 年 1 月だけで
90 万人の患者が出ています。コロナが始まってから最悪の月でした。初期からの感染者累計は、
２月初めの時点で 285 万人、死者数累計 59, 805 人。日本の感染者累計 37 万人、死者累計
5,950 人に比べると桁違いに大きな数字となっています。同国の人口が、日本の半分以下の
4,700 万人である事を考えると、その凄まじさが実感できます。１日の感染者数も 31,712 人と
桁違いで、２月３日時点の日本の感染者数 1500 人の 20 倍。ICU ベッドの 60%はコロナ患者に
使用されており、他の病気の治療が遅れています。

こういう状況なので、スペインでは日本よりも厳しい移動制限が行われています。
仕事や買い物、病院に行く等以外、住んでいる地域を越えた移動には許可証が必要で、親戚で
集まることもままならない状況です。スペインは大家族主義で年末は親戚含めて何十名も集まり
パーテイ―をするのが習慣ですが、昨年末は５人以上の集会が禁じられていた為、できなかった
ようです。ここら辺は日本の方が、まだましでしょうか。

スペインは観光立国で毎年 7, 000 万人近くの観光客（日本は 2, 000 万人程度）が訪れて
いましたが、コロナ禍で観光産業、レストランが大きな打撃を受けています。FC アスレチック
ビルバオや乾選手がいるエイバルで有名なバスク地方は、11 月以降レストラン全体の３％しか
空いておらず、地域の売上が▲98%も落ち込んでいます。国全体では、2020 年のレストラン
関係の売り上げは前年比▲42%減となっています。

スペイン政府の飲食店への営業自粛要請は日本同様にあり、PM６時までです。
夕方や夜がかきいれどきのレストランにとっては痛手ですが、支援策もあり、昨年12月までは
家賃の50%、今年１- ３月は100%まで家賃を減免するというものです。家主はその分税金
関係の支払いを減免してもらえます。この程度では足りないとレストラン業界は述べていますが、
措置自体は日本よりリーズナブルです。

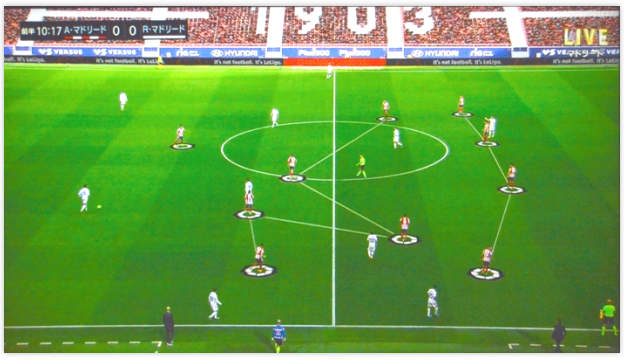
スペインには、もともと日常的にマスクをする習慣がありませんでした。
私が駐在していた 2008 - 2010 年の時にアジアでサーズが流行り、私が米国に留学している
息子に会いにいく許可をもらった際、本店からマスクをして行くようにという条件が付きました。
薬局を幾つか回ってやっと見つけ家族でマスクを付けて空港に行くと、ほとんどの人が嫌な顔を
して我々を避けていました。マスクをしている人は、結核か何か悪い病気を持っているという
感覚だったと思います。それが今では、地下鉄やバスなど公共の交通機関ではマスクをしないと
乗れません。隔世の感があります。

グラナダ市街

バルセロナの地下鉄

家内の友人のスペイン人の中には、２回もコロナに感染した人がいます。
１回感染したから免疫が出来て安全というわけではないようです。ワクチン接種プログラムも徐々に開始されていて、今夏までに 70%のスペイン人がワクチン接種を受ける事を目標としています。80 歳以上のお年寄りの 80%がワクチン接種を終わるのは３～４月頃とのことです。
この辺は日本政府より格段に対応が早いです。

リーガエスパニョーラでは、もともと地域のファンと選手が一体感を生む工夫がなされていて、レアルマドリッドのサンチャゴ ベルナベウ スタジアムでも選手が失敗するとスタジアム全体がため息をつき、得点するとスタジアム全体で選手と共に喜びます。この一体感が、コロナ禍で失われてしまったのです。そこでリーガはテレビ中継で観戦せざるを得なくなったファンに対しハリウッドの知恵も借り、観客の声援、時には応援歌を入れてバーチャルな観客がいるように見せ、カメラポジションも修正して観客が入っていないことを感じさせない工夫を施しています。観客の応援も背景も通常の試合の雰囲気を感じさせ、まるで昔のビデオゲームのようです。
もちろん広告版も見えるようにしています。この辺は日本よりずっと進んでいます。リーガ自体、2019 - 20 シーズンの TV 放映権で 120 億円の収入があるわけですから、力も入るわけです。
世界で 42 の放送局がリーガエスパニョーラを放映し、リーチしている観客は世界で 28 億人と言われています。上記コロナ禍での工夫もあり、巣ごもりの影響もあって 2020 - 21 シーズン出だしの視聴者数は、コロナ発生前の+48%となったようです。コロナ禍の中でも工夫と努力が大切ですね。以上、スペイン駐在の経験を持つ岩田がお伝えしました。



＊マドリードダービー：アトレティコ vs レアル　2021. 3. 7 WOWOW

コロナ対策万全のシンガポール

粟津 義一　（平７卒）

私は三井物産のモビリティ本部に所属し、
現在「アジア・大洋州三井物産（在シンガポール）」に駐在しています。
今年の６月で単身赴任生活が丸３年経ちます。

まず、シンガポールにおける新型コロナウィルスの感染者数について報告します。
政府の早期からの厳しい統制管理により、人口580万人に対して現在までの感染者数は
６万人超ですが、死亡者は29人に抑え込まれ、半年前より市中の感染者数は１日あたりゼロ、
多くても１桁で推移しています。航空便で来星する渡航者の感染が多少増加中ですが、
１日あたり20～30人程度です。

高度医療機関も充実していて、感染者の受け入れ態勢も万全。
ワクチンに関しては、年明けより高齢者・医療従事者・海運などエッセンシャル・ワーカーへの
接種が始まり、外国人も含めて夏頃には行き渡ると聞いています。但し、政府発表により
在宅勤務が今後の標準となる為、働き方は大きく変わっていくと思います。

会食は昨年8月より解禁され、最大５人まで可能となりました。
営業時間は22：30までですが、年末に最大８人まで可能となり、海外旅行が出来ない
シンガポール人や外国人の消費先として、飲食業界は大変活況です。また月を追うごとに
ゴルフ、自転車、ハイキングなどを楽しむ人々の外出も増えてきています。

一方で厳格な厚生省の見回りや抜き打ち検査があり、マスクを付けない、
或いはソーシャル・ディスタンスを守らない外国人が昨秋母国に強制送還され、勤務先も
新規VISA発行停止処分となったり、飲食店が免許取り上げや営業停止を受けたりしています。

いろいろと制限はありますが、全体感としては、
とても安全・安心な環境が整えられている事により、生活に不自由は感じません。
但し日本の家族と会えないこと、海外旅行や出張に行けないことは、やはりストレスであり、
世界にワクチン接種が行き渡り、国内外の渡航が少しでも始まることを期待しています。

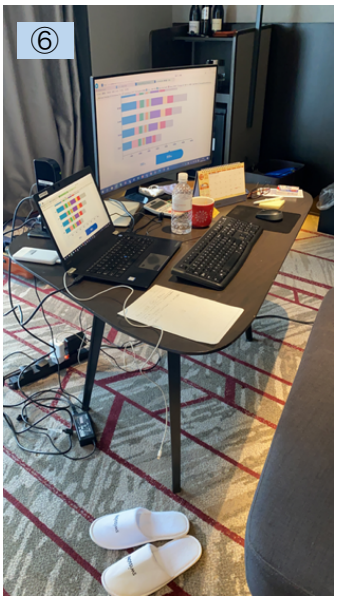
さらに、この１年間に撮った写真を解説しながら近況の報告を続けます。

① マリーナ・ベイのマーライオンは変わらず噴水を出しています。
でも観光客がほぼゼロで、ホテル事業は厳しい経営を強いられています。

② 昨年３月～７月のロックダウン期間に、完全自炊体制となりました。
今ではクックパッドを見ながら、揚げ物からオーブングリル料理まで何でも作れます。
パンも捏ねて焼きます。

③ シンガポールは、ずっと日本食ブーム。
自宅近所のロバートソンキーには沢山の居酒屋があります。コロナ禍でオープンした、
「アメージング北海道」という怪しい名前の居酒屋も、行ってみるとなかなか美味しい。
写真は、こぼれ落ちる演出付きの名物「北海道いくら丼」。

④ 自転車が大流行。もともとロードバイクをやるので、年末に会社同僚と
初めてシンガポール島を１周（120km）して来ました。右から２人目が筆者。



⑤ 昨年11月に一時帰国。チャンギ空港もガランとして
コロナ禍により国際旅客が蒸発してしまったことをリアルに感じました。

⑥ 12月、シンガポールに戻り、政府指定ホテルで2週間の隔離生活。
手配しておいたPCモニターで仕事（とNetflix）に没頭。

⑦ 自宅は国立市にあります。懐かしい駅舎が完成し、
ますます魅力に溢れる大学通りのイチョウ並木を堪能しました。
しかし大学構内やグラウンドは現役学生しか入れない為、見ることが叶わず寂しい。

以上シンガポールより、粟津がお伝えしました。

⚽ コロナ報告 from シリコンバレー

神谷 佳典　（平７卒）

私はカリフォルニア州のシリコンバレー（サンフランシスコから南に60キロ）に
単身赴任で来ています。コロナ、山火事いろいろあった2020年ですが、楽しくやっています。
この記事を書いている12月末現在、カリフォルニア州は毎日３万人が感染。これまでの１日の
最大感染者数は、12月26日の６.５万人。エッセンシャルワーカー以外はオフィスを開けられず、
よって完全に在宅です。それでも１日平均して６ミーティングはリモートで行っていまして、
仕事は問題ないですね。

スタンフォード大学は全面オンライン授業。
一般へは開放されなくなりました。
芝生で時々読書をしていたんですが・・・

サンフランシスコの観光名所、
フィッシャーマンズ・ワーフ。
屋台のような店が並び、
クラムチャウダーや
カニコロッケを売っています。
結構、人が並んでいました。

こちらの写真はシリコンバレーのサニーベイル商店街。
元々この通りは、路上にテーブルと椅子を出して、アウトドアでの食事が OKでしたが、
12月初めから飲食店の営業は、テイクアウト以外ダメになってしまいました。
床屋も閉まりました。ロン毛になりそうです・・・

スーパーは開いているので、
生活は普通にしていけます。
マスク・除菌関係も手に入ります。
しかし、この年末の時期、
行列ができるようになりました。
日本食のスーパーは、入るまでに
２時間かかるらしいです。
いつもなら、40分も並べば
入れたのですが・・

仕事以外では遊びに行くところがないので、最近はランニング、散歩、読書、ゴルフ、
といった感じです。家で飲む酒の量が増えているので、要注意です。
うちの会社のメンバーは UBER EATSやドアダッシュを使ってますが、私はだいたい自分で
作っています。最近のマイブームはアボガドサラダ、アンチョビポテト、インドカレーですね。
以上シリコンバレーより、神谷がお伝えしました。

＊小麦粉・水・塩で、うどんが作れます。

＊カニチャーハンとアボカドサラダ

Maya Kaimal
KASHMIRI CURRY
Indian Simmer Sauce
Maya Kaimal
MADRAS CURRY

⚽ ベトナムは、コロナどこ吹く風 !?

重満 紀章　（平７卒）

良く知られていると思いますが、ベトナムはコロナを早々に抑え込みました。
要素は幾つかあると言われ、１つ目は新型コロナウィルスが仮想敵国である隣国の中国からの「侵入者」である為、他国がまだ問題視していない2019年末の段階から諜報員などを通して情報をキャッチし警戒していたこと。２つ目は国内の病院などのインフラが脆弱で一旦感染が拡大すると、医療崩壊が起きることをSARSの経験を通して自覚していた為、水際での防戦を徹底したこと。そして３つ目は、一党独裁による監視社会が故のプライバシーを度外視した罹患者に対する徹底的な追跡調査と、それを肯定する国民感情があります。

難しい話をしましたが、いずれにしてもベトナムでは国外との行き来に不自由があるだけで、日常生活はマスク着用の他に目立った不自由はありません。先日も取引先の鉄骨メーカーが主催する1,000人は出席してであろう大忘年パーティーに出席したくらいです。トイレの前で並んでいる人たちがトイレから出てくる人たちと握手したり抱擁しあったり、コロナなんてどこ吹く風です。ちなみにそういう飲食が関わる場所ではレストランや居酒屋を含めマスクは誰も付けません。話がコロナから少し脱線しますが、ベトナムには「芸能プロダクション」的なものが存在せず、芸能人たちはみんな自らSNSなどを通して自分をプロモートします。従って忘年会や結婚式、会社の設立記念式典、起工式などのパーティーをイベント企画会社が取仕切り、そこに駆け出しの芸能人たちが花を添えるという光景がよく見受けられます。

取引先の忘年パーティー

ところで、私が赴任前に思っていたよりもベトナム人は色白の美男美女が多いです。
恐らく私のベトナム人のイメージは、ベトナム戦争中に激戦地となったジャングルや中部の山岳地帯や農村を逃げ惑う女性や子供たちのイメージで、ハノイやホーチミンのような街に住む住人たちはロバートキャパなどの報道写真にはあまり登場しなかったのでしょう。また昨今来日する多くのトナム人の技能実習生は貧しい中部出身者が多く、これらのイメージを持っていたと言えます。シンガポールやマレーシアの華僑と同じく、多くのベトナム人は日焼けを極端に忌み嫌い、色が白いことを非常に重要視します。すいません、コロナと全く関係ないですね。

話を戻すと、これを書いている2020年末の市中感染は、ほぼゼロ。
海外からの特別便によるベトナム人帰国者が１日に数人程度陽性となり、隔離療養を受けていますが、死者は累計30人強でほぼ高齢者の持病を持った方に限られ、それ以上に増える兆しはありません。生産活動も９月以降急に再開し、あちこちで材欠の対応に追われる話を聞きます。コロナの終息後は中国からの生産移管など投資活動が一気に再開すると予想されますが、一方で賃金や物価の上昇も気になるところであり、この国のもう一段の発展の為に何が必要か興味深いところです。

下の写真は、会社の職場集会の１コマ。マスクなしでやってます。
ベトナム人は集まって騒ぐのが大好きです。特に私が駐在するホーチミンなど南部の人は。
ということで、以上ホーチミンより、重満がお伝えしました。

重満

⚽「国立コミュニティー」の結束

江口 雄介 （４年）

私の学生ライフということで、大学入学と同時に始めた
「一人暮らし」について書きたいと思います。

結論、「一人暮らし」はとても大変でした。
料理、皿洗い、洗濯、掃除などは、部活を終えた体にとてもこたえました。でもゴキブリを見たくないという気持ちで何とか乗り切り、大変だった分、楽しいこともたくさんありました。特にひとり暮らしをしている同期や先輩、後輩とご飯を食べたり、それぞれの家に泊まりに行ったりしたことは、とてもいい思い出です。

国立の独り暮らし勢は、通称「国立コミュニティー」と呼ばれ、強い結束があります。
練習終わりの飯、お泊まり会など活動内容は様々です。今年は外部のグラウンドを借りる機会も多かったので、みんなでカーシェアをして行ったりしました。部活動を引退し、実家でのんびりしていると、こうした日々が何だかとても恋しく感じます。

一人暮らし期間での一番の思い出は、同期の１人を僕の部屋で男にしたことです。
彼は絵に描いたような童◯でした。そんな彼を男にしてあげたいという同期たちの思いに心を動かされ、僕は彼のために自宅にデ◯◯ルを呼ぶことを承諾しました。彼がことを致している２時間は、人生で最も長い２時間でした。その間、同期数名と近くのジョナサンで時間を潰していました。彼から“終わった”との報告を受けて家に帰ると、床は濡れていて、賢者になった彼はエピソードトークを披露しますが、とてもつまらない。死ぬほど後悔し彼に苛立ちを覚えました。“せめて面白いエピソードくらい作ってくれよ”、と。

翌日、僕は事後のベッドを処分し、新しい寝具を買いに行きました。
最悪の思い出ですが、衝撃的すぎて忘れられません。今でも彼の顔を見ると、あの日のことを思い出します。でも、不思議と苛立ちは消えてしまいました。４年間共に戦い続けた同期の仲はそれほどのものだということでしょうか。これからも同期との絆を大切に過ごしていきたいと思う、今日この頃です。雑なまとめ方になってしまいました。僕も上手にエピソードトークができるよう精進していこうと思います。

今この記事を書いていて、まだ彼から新しい寝具を購入した際の費用を
貰っていないことに気付きました。やっぱり彼には苛立ちを覚えずにはいられないようです。

⚽ 早起きは三文の徳？

太田 悠斗 （４年）

私の学生ライフ、特にア式ライフの最大の特徴はやはり家の遠さであろう。私は千葉に住んでいて、そこから４年間部活に通い続けた。
小平グラウンドまでは電車と歩きで片道２時間。新型コロナの影響で小平グラウンドが使えなくなっても、練習するグラウンドは大体東京の西の方だったので所要時間は変わらなかった。
朝の早さという点で最悪だったのは浅川グラウンドでの８：00 からの練習。何と４：30 起きである。ここで、４：30 起きの日のスケジュールを紹介する。

４：30 起床

大学生の弟は、さっき寝たんじゃないかくらいの時間である。
誰もいない暗いキッチンで朝食を作る。入部したての頃は、駅からグラウンドまでの道でコンビニのおにぎりなどを食べていたが、コンディションに悪影響が出そうなので早々にやめた。

５：05 出発

まだ夜は明けない。家から駅まで自転車で 10 分である。なんで電車でも遠いのに、駅からも遠いのか。朝が早すぎて誰にも会わないので、歌を歌いながらチャリを漕ぐ。

５：20 電車に乗る

こんな早い電車だけど、結構人がいる。
いつものおじさんは、今日もドアの脇に立っている。

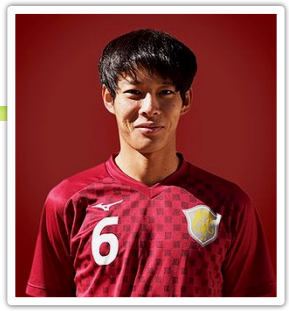
７：10 グラウンド到着

大体５番以内に着く。これは意識が高いのではなく、乗り合わせが悪すぎて１本電車を遅くすると遅刻するのだ。

こんな感じの朝を過ごすのだが、もうひとつ最悪な練習を思い出したので書いておく。
色々な良くないことが重なった結果の７：00 体育館ストレッチして集合。これは本当に良くないことが重なった結果で誰が悪い訳でもないのだが、最悪だった。始発以外間に合わない。始発を逃した瞬間遅刻。練習に来るためにこの時の私以上に早起きをした人間を私はまだ知らない。

ここまできつかったことを書いたが、ア式での４年間は間違いなく楽しいものであった。
学生最後の４年間で真剣にサッカーに取り組めたこと、素晴らしい仲間に出会えたことは私の学生ライフの財産である。最後になりますが、日頃から活動にご支援頂いた OB の皆様、ありがとうございました。

自分の目から見たア式 LIFE



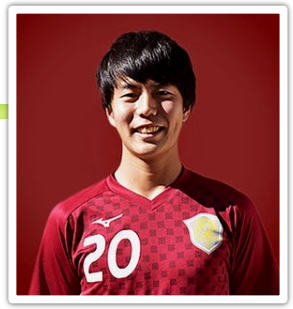
宮林 佑太 （４年）

私の学生ライフは、世間一般にイメージされる大学生の生活とは
かけ離れていたように思える。高校の同級生のほとんどは体育会には
入らなかった。彼らとは定期的に会っていたが、学年が進むにつれ常識や感覚は、ずれていくものなんだなとしみじみ思っていた。朝早起きする事、食事の写真を撮ってラインに送る事、ほとんどお酒を飲まない事、多くの時間を部活に費やす事などを彼らは不思議に思っていたようだった。
“なんで沢山楽しい事が溢れてるのに、わざわざ大学で部活やるの？”と聞かれた事もある。
そんな事を言われたって自分にとっては毎日が十分楽しかった。朝起きて練習をして、同期や先輩後輩とご飯を食べて、週末に試合をするという生活。もし私立の大学に行くことになっていたら、おそらく体育会でサッカーはやっていなかっただろう。だから部活に入った頃は、この生活を勝ち取ったというような感覚が少しあった。だが部活はだんだんと自分の中で日常の当たり前のものになっていく。そうして気づいたら、いつに間にか部活を引退していた。

大学１年生の頃から日記を書いている。引退してしばらく経ってから日記を読み返してみた。
もちろん楽しかった事ばかりではなく色んな感情がノートには書いてあった。部活があまりうまくいっていない時の筆跡は荒く、上手くいっている時の内容は前向きで明るかった。やっぱり部活を中心に大学生活が回っているようだった。これまでの人生の長い期間、生活の中心にサッカーがあったので、引退してサッカーから離れたらどうなるのだろうと思っていた。目標が無くなって、何にもやる気が湧かない状態になってしまうのではないかと少し怖い思いもあった。しかし、
引退してからしばらく経つが、意外と今の自分はサッカーをしない生活に馴染んでいる気がする。
それが、何だか安心しながらも少し寂しくて、人生の別のステージにこれから進んでいくという実感に変わっていく。

とにかく私の学生ライフは、あっという間に終わろうとしている。
当たり前だけど、この先も人生は続いていくんだなというのが、今の率直な気持ちだ。

⚽ 平凡で非凡な every day



櫛田　潤　（３年）

私の１日は、iPhone の一番オーソドックスなアラーム音で始まる。
絶対にスヌーズの世話にはならない。音に気き少し目が開いた段階で
一気に目を見開いて 10 秒キープする。これで勝手に起きる。
家にいる時、移動する時は、基本的に Tver か、同期の居候 Amazon Prime を見ている。
最近は「野性爆弾のザ・ワールドチャネリング」と「笑イザップ」にハマった。

午前練が終わると１日の楽しみ、食事の時間だ。
店を選ぶ際の基準は「量が多いか」が非常に多くを占めることになる。
好みはあるにしても商売で飲食をやっている以上、私が不味いと思うことはほとんど無い。
これは私の良い所で、幸せだと思う点だ。あと余談だが、大盛り無料の店で普通盛りにする人って
何なんだろうかと、最近寝る前にずっと考えている。理由は全く分からないまま、気づけば朝、
目を見開いている。

食事が終わると、いよいよ授業だ。
私は現在のア式には希少な法学部生なので、１人か２人で授業を受ける。一橋の法学部には
著名な教授が多く、非常に密な教室で、密な情報を１つ１つ整理して自分のものにしていく。

授業が終わると、いそいそと中央線に乗り込む。
また余談になるが、中央特快が三鷹に止まって吉祥寺に止まらないのはなぜだろうかと、
最近寝る前にずっと考えている。吉祥寺に特快を止めてしまうと今以上に混雑し、
吉祥寺という街の良さが失われてしまうからだと踏んでいる。

吉祥寺で夕飯を食べて帰る日も少なくない。
吉祥寺は条例で定められているのかと疑うほど、ご飯お替り無料の店が多い。その日の気分にも
よるが、オススメは「山本のハンバーグ」と「吉祥寺食堂」だ。数多く立ち並ぶラーメンの名店を
横目に見ながら、“引退したら食べに行くよ”と約束して通過する。高校の友達と食べる時には
少し気を遣うことがある。サッカー部の鉄則、「食事ライン」だ。食事の写真を撮っていると、
インスタキャラでもない私が調子こいて写真を撮り出したと思われるのが嫌で、
“これ、写真を撮って部活のラインに載せないとなのよ…”と、
ダルそうに、気恥ずかしそうに、でも言及されるよりは確実に早く言う。

と、ここまでコロナ以前の１日の様子を書いてきたが、とても懐かしくなった。
何てことのない生活が恋しい。一橋の売店のみで１月 29 日まで使える、
今にもゴミと化してしまいそうな 1000 円クーポンをどうしようかと考えている。

さて、ここからはコロナ渦において私たちア式部員が、
いや、私がどのようなことを感じて自粛生活を送っていたか、簡単に書いていこうと思う。

３月早々、活動ができなくなった。その頃はコロナの威力も大して分かっておらず、
“もしかしたら１年後とかもまだ自粛してんじゃね？”などと言いながらも、そんなことはないだろうと思いながら、ただ部活がないという感じだった。宣言の前までは自主練もしていたしア式の同期や後輩と何度か遊んだが、３月初めから何もできなくなった。自主練もひとまず止めオフみたいになった。外で遊べないオフは、とんでもなかった。授業も始まらなかったし、
とにかくやることが無くて、『鬼滅の刃』と『約束のネバーランド』を読破した。

確か５月くらいからオンライン体幹トレーニングが始まった。
朝の８時か９時に zoom を起動し、７人くらいで同じメニューをこなす。僕的には結構きつくて“５月にしては暑すぎるだろ！”と思いながら汗だくで体幹した。LABA の会員が間違えて入って来るくらい汗と熱気がすごかった。ケガ明けだった僕はリハビリにも行ったが、マスクを付けながらなので、もっときつかった。着衣水泳の後みたいに濡れた後、ベッドでマッサージを受けるように命じられた時は申し訳なさ過ぎて、患者にここまで申し訳なさを感じさせる理学療法士にキレそうになった。チームからランニングメニューも与えられ、家の近くのグランドの外周で走った。皆でなら絶対余裕なメニューも１人だと中々きつかった。でも僕はケガで幾分か遅れていると分かっていたので、その気持ちで何とか頑張れた。

コロナ渦のこと、書いていて長いなと分かっているが、
もう１つ書くべきトピックを思い出してしまった。僕は新歓代表だった。とは言っても、去年はオンラインでの新歓だったので稼働は少なかった。先行きが不透明すぎて新歓班ミーティングをしたが、実質何も話さず終わったこともあった。先輩の木田さんと大学体育会連合の YouTube 配信みたいなものを一緒にやった。後は Twitter で新入生を募集していたら、40〜50 人くらい連絡をくれた。結局入部したのは 25 人くらい。労力当たりの新入部員数は歴代１位なのではないかと思う。そして８月、１年生を加えて約半年ぶりに部活が再開し、自粛生活は終わった。

⚽ おうち時間のマイブーム

井上 絢菜 （３年 MGR）

自粛自粛と言われている中で、数少ない友達にも会えず、
旅行するわけにもいかず、なんとも退屈な日々を過ごしていました。
そんな私が楽しみながら行っていることが２つあります。

１つ目はアルバイトです。
私は小平市にある某カフェでアルバイトをしています。お店は小平駅から徒歩 17 分で、
アクセスとしてはあまり良い方ではありません。新作はそれなりの頻度で出るし、覚えることは
たくさんあるし、家からかなり遠いし、今までやってきたバイトの中では一番ハードです。でも
毎回仕事は楽しいし、辞めたいと思ったことは一度もありません。閉店後に終電めがけ駅まで
ダッシュするのは体力的につらいけど、顔にかかる冷たい風がすごく心地よかったりもします。

ア式の人は（若干名を除いて）お店に来たことがないのでわからないと思いますが、
バイト先の私は多分結構ニコニコしています。いろんな人に自分から話しかけるし、初対面の
お客様とも話します。私を知っている人にとっては、びっくりだと思います。周りから無愛想で
無表情と言われている私が、まさかバイト先でニコニコしているなんて！ 部活では、比較的
冷たい印象に取られることが多いから、そのキャラを崩せないし、今後も崩せそうにありません。

ところで４月に緊急事態宣言が出た時、お店も休業になりました。
宣言解除後もテイクアウトのみの利用になったり、営業時間が短縮になったりしたので、
シフト時間が短くなることは多かったです。ただ時間が短くなった分を、ある程度
補償してもらえたので、生活に困るほど収入が減るというようなことはありませんでした。
休業中も社員の方が連絡を取ってくださったりとサポートが充実していたので
特に不安に思うこともありませんでした。これからもバイトを頑張りたいと思います。

２つ目はインスタグラムです。
私がインスタではまっているのは、美味しいご飯屋さんを探すことです。インスタで検索して、
美味しそうなお店をひたすら保存しています。結局フッ軽（フットワークが軽いの意）とは
程遠い人間なので実際に行くお店は少ないけれど、美味しそうなものを見ているだけで、
すっごく幸せな気持ちになります。個人的にはパンケーキとかお洒落なサラダとかよりも、
天ぷらとかカツ丼とか、ガッツリ系が好きです。巷のお洒落な女性の間で流行っているような
ものは自分にはちょっとハードルが高いし、何といっても周りで食べている女子が眩しいので、
怖くてお店に行けません。自粛が明けたら頑張って都心の方に行って、美味しいものを食べ歩く
ツアーを開催しようと思っています。友達に会えたらお洒落なカフェにも挑戦したいと思います。

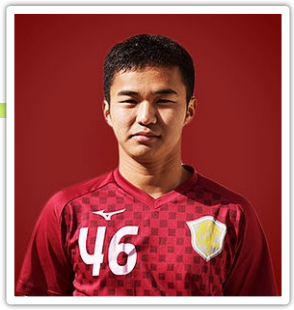
ここで、改めて自粛期間中の部活について振り返ってみると、
部員と直接会うことは基本的に一切ありませんでした。定期的に zoom で少人数の
イベントを行うという企画があったので、画面上で顔を合わせるくらいだったと思います。
食事ラインも続けていました。でも、マネージャーとしての心情を正直に言うと、
すごく寂しさがありました。

他のマネージャーとはたまに連絡をとっていたので感じることはありませんでしたが、
選手たちとの溝が深まっていってしまうような危機感がありました。
オンライントレーニングをしたり、近所でボールを蹴ったりと活動している選手たちに比べ、
自分たちは何もできていないのではと不甲斐なさを感じました。実際にある選手に、
“今のマネージャーは情けない、それなら練習に来なくていい”とまで言われてしまい、
すごく悔しい思いをしました。個人的にはすごく辛い期間でしたが、
自分と、ア式と、落ち着いて向き合うには、いい機会だったのかもしれないと思います。

活動が再開してからは、新しいスタッフが入部したり、戸田コーチの存在だったり、
部内の仕組みが今までと大きく変わっていたので、そこに対応していくのが難しかったです。
活動停止中に行っていたミーティングの結論に基づいて、A チームと B チームに分けて
練習を行うことや、週 6 日の活動になるなど新しい取り組みがスタートし、
選手もサッカーに向き合う時間が格段に長くなったのではないかと推測します。

チームとしては活動再開に対する安心感と、
リーグ戦が迫っていることへの焦りが少しあったように思います。
個人的にはグラウンド確保という面で、リーグ戦の運営にひたすら頭を悩ませていましたし、
今までにない状況でのリーグ戦ということで、後輩や同期にたくさん力を借りました。
昨年の苦しかった期間の経験は、今年のリーグ戦にきっと活かせると信じています。

⚽ コロナ禍の楽しさと悔しさ



加藤 紘基 （２年）

2021 年は初めからコロナ感染者が急増し、２度目の緊急事態宣言が発令されている中で一度も足を運ぶことのなかった大学の授業と課題が終わった。部活自体も２月現在まで再開の許可は下りていないが、今になって昨年の活動自粛の時期のことを思い出す。昨年は３月３日から活動自粛が決定し、許可が下りる８月 11 日までの約５か月、部員で集まって活動するということができなかった。部内で行っていたオンラインのトレーニングに加え、家の近所の公園でボールを蹴ったり、感染者が減ってきてからはジムに通うなど個人でトレーニングを行ってはいたものの、思うように身が入らなかったり、しんどい時には手を抜いてしまうこともあった。このようなときに部の仲間とトレーニングすることが、いかに良いことか、楽しいことかを痛感した。もちろん部活ができないということはとても悔しく悲しいことではあったが、部としてサッカーができない中、また感染状況が比較的落ち着いてきてから、自分なりにオフの楽しみ方を見い出せた。この機会を借りて２つほど紹介したいと思う。

ウイニングイレブン大会

これが一番盛り上がる遊びだったかもしれない。
部員５人で zoom をつなぎながら、PS4 でサッカーゲーム「ウイニングイレブン」のオンライン対戦を総当たりで行う。もし負けてしまうと後日ご飯をおごらされるだけでなく、「弱い」というレッテルが貼られ、他の部員にいじられることになるため全員が本気で試合する。意外とウイイレにもその部員のプレースタイルが現れることが多いところも面白い点である。心当たりも自覚も特にないが、部活で集まるといつも弱いといじられている理由は、この大会の結果によるものなのかもしれない。

サウナ

最近流行ってる「ととのう」ってやつ。
１人で昼間に行けば人も少なく会話もしないので、安全に「ととのう」ことができるのが魅力。
サウナ → 水風呂 → 外気浴のゴールデンルーティンを３周し、お休み処で牛乳を飲み干した後の世界は素晴らしいので本当におすすめです。ただし感染対策は入念に。

このようなリフレッシュの方法で、人よりは自粛期間を楽しんで過ごすことは出来ていたのかなと思う。しかしあくまでも主軸はサッカーであり、そこで努力や成果を出さないと意味がない。自分は２シーズン連続で悔しい思いをして、昨年に関しても部活動の再開がリーグ戦の開幕直前だったため、思うように活躍できなかったが、その原因は準備期間中の自分の甘さにあった。今シーズンはしっかりと良い準備を重ねてきていると感じるので、自分の良さを最大限に出せるよう努力していきたい。

畏友 志摩憲一を偲ぶ

橋本 昭一 （昭 31 卒）

“今年の現役の話題は１部昇格と人工芝。どちらも早いゴールを期待しましょう。
私の現役観戦は体調がままならず、昨年で打ち止めとなりそうです。
来年以降の新年のご挨拶も失礼致し度くご了承ください。”

これは、志摩が令和２年にくれた最後の年賀状である。
一橋大学ア式蹴球部の昭和 31 年の卒業生は、馬場 猛、中岡敬雄、松丸鉱市、福江睦郎、桃井昭二、橋本昭一、そして志摩憲一の７名であった。戦後の混乱期と食糧難の時代を乗り越えて頑張った仲間である。卒業後も「七福会」と名付け機会をみては集まる仲の良い同期で、常にその中心にいたのがキャプテンの志摩だった。

志摩のサッカーは、東北の仙台一中・一高で基礎が作られたらしい。
転校した立川高校ではサッカー部を敬遠していたが、一橋大学に入学すると直ちにア式蹴球部に入部。１年次の秋のリーグ戦で、早くも病気欠場の先輩の穴を埋めるために FB で出場した。２年次からは守備の要 CH に定着し、４年次にはキャプテンとなってチームをリードする存在となっていた。率先垂範の信望厚いキャプテンだった。
想い出は尽きないが、思いつくままに列記してみる。

志摩

1．勝利の美酒

昭和 30 年春、三商大戦を前に志摩とマネージャー馬場が
中山伊知郎学長に直接お願いし、学長杯を新調した。
当時関西 1 部の神戸大に 2 - 0、大阪市大に 4 - 0 で快勝。
真新しい優勝杯になみなみと満たしたビールを口にした
志摩の会心の笑顔は、今でも忘れられない。

2．リーグ選抜チーム

リーグ戦の終了後、関東 2 部と関西 2 部の対抗戦が関西で行われた。
リーグ優勝の東農大を中心に編成された関東は、接戦の末に 1 - 2 で惜敗した。
わが一橋からは志摩が唯一人選ばれて出場し、奮闘した。
“スポーツ新聞に名前が載ったのは、これが最初にして最後だ ”と、
卒業 50 周年の文集に書いている。

3．現役の試合応援・観戦

志摩のリタイア後の年賀状には、毎年、昇格の喜び、降格の無念さ、維持・定着への願い、
残留できた安堵感等々、現役への期待・願いが書かれていた。彼ほど高齢で数多く応援・
観戦に行った人は居ないのではないかろうか。“年寄りでも女子マネにはモテモテだぞ ”と、
差し入れのスポーツ飲料を車に積んで通ったそうだ。

4．酉松会新聞

酉松会新聞にも創刊号・3 号・5 号・10 号とまめに投稿し、現役の課題を見つけては
適切な提案をしている。何よりも現役のチーム力向上を願い続けていた。

5．如水会 昭和 31 年会

如水会の中でもよく集まることで知られていた昭和 31 年会も、卒業 60 周年をもって
終わってしまったが、志摩は奥様とご一緒に皆勤だった。循環器系の大手術などを乗り越え、
いつも元気な姿を見せていた。

今にして思えば、冒頭の年賀で相当な体調の悪さを訴えていたのに気づかず、
お見舞いの電話もせず、コロナ禍でご葬儀にも出られず、本当に申し訳なく思っている。
心から御冥福をお祈りいたします。

編集後記

⚽ コロナ禍から新時代へ

福本　浩　（昭 52 卒 編集長）

寄稿してくださった OB、現役の皆さん、ありがとうございます。
今回はコロナ禍にまつわる話題を中心に書いていただきました。今年卒業する４年生は、
１年次にはグラウンドの無断転貸による活動停止、４年次にはコロナ禍による活動自粛を経験した
稀有な世代で、その複雑な思いが文章の行間に滲んでいます。よく乗り越えてくれたと思います。
また「海外コロナ便り」は現地での生活体験に基づくものなので、既存メディアのニュースより
はるかに身近でわかりやすく貴重な情報でした。そして橋本さんの追悼文からは、昨年逝去された
志摩さんの生前のお姿が偲ばれます。長年サッカー部を物心両面で支えてくださった方で、特に
晩年は人工芝化プロジェクトだけでなく、通例の年度会費においても多額の寄付を頂きました。
改めて感謝を申し上げると共に、謹んで哀悼の意を表します。

令和３年は、年明け早々に２回目の緊急事態宣言が出され、
３月になっても感染者数は下げ止まりの状態で、先行きは不透明です。
そんな中で迎える一橋大学ア式蹴球部の創設 100 周年。小平の人工芝グラウンドが竣工し、
戸田和幸というプロフェッショナルな新監督の指導の元、我が部は新しい時代へと向かいます。
思えば、創部当時もスペイン風邪による世界的なパンデミックが、まだ燻っている状態でした。
何だか不思議な符号を感じます。何より大切なのは、早急な結果を求めるのではなく、
長い目で見守っていくことだ、そう教えてくれているような気がします。

酉松会幹事会は、現在、会員名簿の整備に取り組んでいます。
創部から現在までの 100 年間、在籍したサッカー部員の総数は何人になるのか・・
この素朴な質問に正確に答えるのは難しく、名簿で確認できる限りの大雑把な数ですが、
およそ 800 名。この数字は私にとって意外であり、我が部は本当に小さな組織なんだな、
よく 100 年も続いてきたな・・そう思います。

そして、この 100 年で逝去された OB は、およそ 160 名。
彼らもまた、人工芝グラウンドで練習・試合をする現役たちを、空の上から目を細めて
見つめていると信じます。一橋サッカー部伝統の気風を表す、この言葉を噛みしめつつ。

“試合は選手だけのものではなく、サブから先輩も含めた全員の闘いである”

この稿の最後に、忘れがたい、ある先輩のことを記しておきたいと思います。
現在の酉松会名簿には載っていない、新福 正さん（昭 48 卒）です。
平成５年（1993）６月 21 日に逝去されました。

新福 正

私が入学した年に卒業されたので、現役時代に出会った記憶はありませんが、
１つだけ今も残る記憶があります。それは新福さんが、JR 総武線信濃町駅のすぐそばにある
慶應大学病院の病床で、毛糸の帽子を被り、穏やかな微笑みを浮かべながら座っている姿です。
骨髄性白血病でした。言葉も交わしていないと思いますが、その後、国立競技場へサッカーを
観に行くたびに思い出しました。不思議でした。新福さんの人柄や佇まいに、一瞬で惹かれた
からかも知れません。

今回、名簿を整理するために先輩方とメールをやり取りする中で、
新福さんの生前の姿に触れることができました。やはり思った通りの方でした。
恥ずかしながら、新福さんのお見舞いに行ったのは現役の時だと長年思っていましたが、
卒業して 10 年以上経った頃でした。記憶というのは自分で勝手に作り上げてしまうようです。
それはともかく、以下に先輩方から頂いた新福さんを偲ぶ追悼メールを、受け取った順に
列記します。みなさんにも忘れがたいサッカー部 OB がおられると思います。そうした方々を
思い出すきっかけになれば幸いです。

押本 正敬 （昭 48 卒）

新福君の逝去日は、手許の「一橋大学昭和 44 年入学者名簿」によれば、1993 年 6.月 21 日。
私が新日鉄大阪支店に勤務していた頃、白血病治療の全国的権威であった名古屋日赤病院に
入院中の彼を見舞ったことがあります。その時、彼は自分の境遇、すなわちもう治る見込みが
ないことを完全に理解していました。無論そのこと自体には、お互い触れませんでしたが、
しかし話題は実に多岐に亘りました。死を前にして、もはや気取りや衒いを超越してしまった
彼の話しぶりの驚くべき「透徹性」は、今でもはっきり覚えています。
“もうすぐＪリーグが始まる。地元の名古屋グランパス８にはリネカーが来るらしい”
といった世間話もしたのですが、その後、幾許もなく逝ってしまいました。Ｊリーグの発足は
1993 年の５月ですから、彼はＪリーグを見たのだろうかと今更ながら少し気になります。

矢野 進一 （昭 48 卒）

押本君のメールにあるように、名古屋の日赤病院に見舞いに行ったことはよく覚えています。
担当の医師に容体等を詳しく聞いたところ、
“肉親ではないので本来詳細な話はできないのだが、サッカー部の友人ならいいでしょう”
と前置きして、その先生が言うには、
“はっきり言って、もう長くはないでしょう”
“我々と話している間に彼はうどんを食べました”
と報告したら、
“うどんを食べたとは意外です。抗がん剤の副作用で内臓はもうボロボロだから、
固形物はほとんど食べられないはずです。友達が来てくれて、うれしかったのかな”
と言ったのが、強く印象に残っています。それから間もなく彼の訃報を受け取りました。
葬儀の時に、彼のお父さんが（確か、某大学の教授だったはず）すごく肩を落として、挨拶を
述べるのもやっと、という感じでした。愛する息子に先立たれた親の気持ちは、察するに余り
あります。この時のお父さんの表情は、今でも忘れられません。

彼の病はドナーが見つかって骨髄移植ができれば、かなりの確率で寛解するのですが、
当時はデータベースなどがよくできていなかったので、ドナーを見つけるのが大変でした。
今はドナーの登録数も大幅に増え、コンピュータでデータベース化がしっかりできているので、
かなり見つけるのが容易になっているようですが、当時は大変で、新福もアメリカにまで手を
回したようですが、結局ドナーが見つからず涙をのんだのです。すごく無念だったと思います。

山根 言一 （昭 52 卒）

名古屋の病院へのお見舞いに参加しました。
東京での治療がなかなかうまくいかず、ご自分で一番可能性のある先生を探されて
行かれたと記憶しています。アメリカのドナーを探されていることも話されていました。
ちょうどその時に「骨髄バンク」の支援をやっていたので、とても記憶に強く残っています。
「骨髄バンク」を広げなければと強く思いました。

新福さんは、私の出身校である戸山高校の先輩でもあるのです。
一番印象に残っているのは、高校の夏合宿で夕立に降られ泥々になって練習している時に、
優しく笑いかけながら自分のタオルで、そっと顔を拭いてくれたことです。
“なんて心細やかな人なんだろう〜”、それが強烈に心に残っています。
そしてもう１つ、柔らかな体を活かした「ジャンピングボレー」です。
本当に惚れ惚れする「ジャンピングボレー」で、高校からサッカーを始めた自分には、
芸術品をスローモーションで見ているように感じました。

また、どなたかの話しによると、新福さんは視野が広く、
とてつもなくスケールの大きい「最後のバンカー」だったようです。
興銀に入社して、産業を育てる視点でバンカーとしての仕事をされたと聞きました。
急性骨髄性白血病は、今はかなりの確率で治るようです。
もう少し早くその時代が来ていれば助かったのにと思うと、本当に残念でなりません。

山崎 彰人 （昭 49 卒）

現実と向き合っていつも冷静で、自分を見失うことがない本当に強い人でしたが、
人にはやさしく気を遣う人間性が素晴らしかったと思います、
私も一度お見舞いに行ったことがあり、お亡くなりになる少し前で最後になるかもしれないとは
聞かされていたと思いますが、明るく振る舞われていて、却ってこちらが励まされました。

確か香港に駐在され、興銀でも卓越した方と聞いており、
早世されたことは日本の損失といってもいいくらいの人でした。

確かにジャンプボレーがうまかったのも覚えていますが、
ロビングクロスの精度がメチャ高く、
何度もヘデイングゴールのアシストをしてもらったことが思い出されます。　合掌

阿部 匡順 （昭 51 卒）

その通りです。穏やかな中に芯のある、また親しみやすく、ほっとする方でした。
本当に残念でした。月並みですが、しみじみと思い出されます

大江　健 （昭 49 卒）

私の新福さんの第一印象は、“戸山高校出身でこんなに上手い人がいるんだ！”という驚きでした。
一緒にプレーしたのは３年間ですが、その間、彼は常にミッドフィールドの中核でした。
テクニックに優れた彼は、概して派手なプレーをしなかったのですが、唯一の派手なプレーが
体を横倒しにしての「ジャンピング・ボレー・シュート」だったと思い出されます。
そして彼は、このプレーが大好きでした。

新福さんはゼミ（宮川ゼミ）の先輩でもありました。愛車はＶＷビートルでしたね。
興銀に於いて中国関係の分野で先駆的に大いに活躍していたと聞いているので、
彼が 30 年後の今の中国を見たら、どのような感慨、感想を持つのだろうかと思ってしまいます。

骨髄性白血病との報に接し、同期・他の有志を募ってドナーになれるかどうかを判定する
検査を受けに慶応病院に行ったのですが、結果は限りなく可能性ゼロ。その後、若干名で病室に
いる新福さんを見舞いました。すでに丸坊主頭の彼が悟りきったように穏やかに話していたのが
思い出されます。ところで新福さんのお墓は、偶然にも我が家の墓と同じ霊園の同じ区画に
在ります。墓参りに行くときには、新福さんのお墓にも立ち寄るように努めています。

宮内 正敬 （昭 47 卒）

慶応病院へお見舞いに行きました。彼は元気に対応してくれて、
“10 万人の血髄があれば自分に合致するものがあるんです。
　従って日本では難しいので米国に行って治療を受けたい”
と言っておりました。私も、
“自分の血髄が合うかどうかわからないが、 帰りに血髄検査をするから”
と言って別れました。彼の現役の時のプレーは皆様が仰る通りで、私を含め先輩のプレーに
対するコメントは厳しいものがありましたし、そのくらい彼のレベルが高かったのです。
返す返すも大変惜しい人材を失ったと思っております。